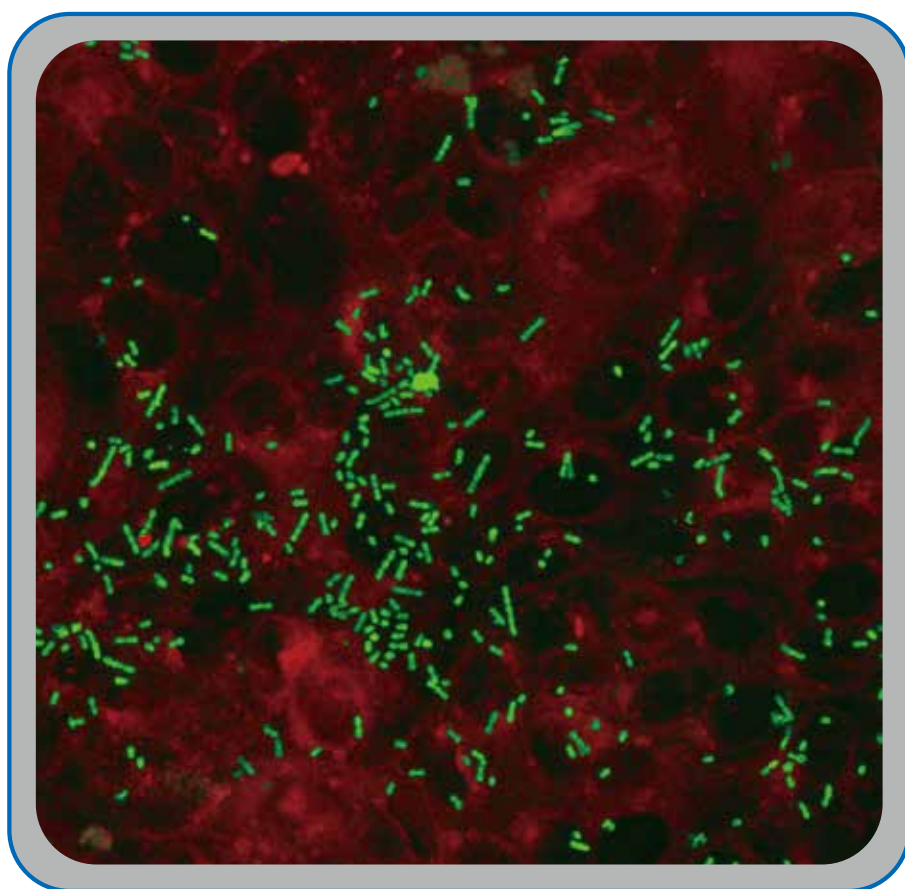


第33号

さくらしま

2019



鹿児島大学大学院
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室

同門会誌

〔表紙写真の説明〕

肺炎球菌が咽頭上皮細胞へ接着している様子

目

次

巻頭言	1
会長の挨拶	2
I. 同門会員業績・学会発表	4
II. 教室行事	
1. 共催の講演会	6
2. 第21回さくらじまフォーラム	6
3. 第17回「鼻の日」市民講座	7
4. 第12回耳の日ならびにアレルギー週間公開講座 報告	7
III. 第120回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会	9
IV. 同門会報告	16
V. 地域医療報告	17
VI. 特殊外来通信	
難聴・耳鳴・めまい外来	19
VII. 病理集計	20
VIII. 手術実績	21
IX. 各種科学研究費	22
X. 業 績	
1. 原 著	23
2. 総 説	24
3. 国内学会発表	25
4. 国際学会発表	31
5. 学位論文要旨	32
XI. 医局通信	
1. 新入局員紹介	39
2. 医局人事	40

3. 学会報告

①第37回 気道分泌研究会	41
②第119回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会	41
③第42回 日本頭頸部癌学会	42
④第80回耳鼻咽喉科臨床学会	43
⑤第13回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会	43
⑥第33回 日耳鼻九州連合地方部会学術講演会	44
⑦第6回日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会総会・学術講演会	45
⑧第31回 日本口腔・咽頭科学会 9月13日～14日 名古屋市	45
⑨第57回日本鼻科学会総会・学術講演会	46
⑩第28回日本耳科学会総会・学術講演会	46
⑪第70回日本気管食道科学会総会・学術講演会	47
⑫第29回日本頭頸部外科学会ならびに学術講演会	48
⑬第37回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会	48
⑭ The 17th Japan-Korea Joint Meeting Gwangju, Korea	49

4. 関連病院便り

①鹿児島医療センター便り	50
②鹿児島市立病院便り	52
③厚生連病院便り	53
④（#平成最後の）藤元総合病院便り2019	54
⑤鹿児島生協病院便り	56
⑥天辰病院便り	57

XI. 関連病院と診療日案内	58
-----------------------	----

XII. 海外同門会名簿	61
---------------------	----

XIII. 自治医大研修生	65
----------------------	----

同門会会則	67
--------------	----

編集後記	69
-------------	----

巻 頭 言

黒 野 祐 一

去る5月1日に元号が平成から令和へと変わり、新たな時代がスタートしました。その改元からまだ1ヶ月しか経っていないのに、平成が懐かしい響きを持って聞こえるのは、時の過ぎ去る速度が一段と増してきたからかもしれません。実際、私にとってまた教室においてもこの1年は猛スピードであわただしく過ぎていきました。

昨年5月31日に第119回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会において宿題報告を無事に終えることができ安心したのも束の間、同年11月17、18日に福岡市で開催する第32回日耳鼻専門医講習会、そして令和元年5月8日から5月11日まで大阪で開催する第120回日耳鼻総会・学術講演会、さらには日耳鼻125周年記念誌の発刊に向けて、それぞれ実行委員長、会長、編集委員長としての仕事に追われる日々が始まりました。猫の手も借りたいほどの忙しさでしたが、猫の手が役に立つわけではなく、少ない教室員の手を煩わせることはできず、ここは孤軍奮闘して乗り切るしかないと決意し、それぞれの作業に集中するとともに混乱を避けるため、デスクトップパソコンのほかに2台のノートパソコンを準備して各業務別に使い分け、3台のパソコンを相手にまさに一人三役で格闘する毎日が続きました。そのため本業である臨床、研究、学生教育の時間が少なくなり、教室員に大変な迷惑と苦勞をかけたことと思います。また、戦う相手の巨大さと忙しさに負けそうになったこともあります。森山理事長ならびに日耳鼻役員、私にこれらの大役を命じてくださった日耳鼻前理事長の久先生、そして多くの関係各位の励ましとご協力のお陰で、何とかすべての業務を遂行することができました。

専門医講習会はEXILEのコンサートさらに大相撲九州場所と重なりホテルの確保が困難であったこともあり、参加者数が当初予定していた数には及びませんでした。しかし、2012年に同じく福岡で開催された第26回専門医講習会時よりも多い2,279名の参加を得てとても盛況でした。また、予定通りにこの専門医講習会開催時に日耳鼻125周年記念誌を発刊することができ、肩の荷が3分の1になりました。ところが、2019年5月1日に新天皇が即位され、それに伴ってゴールデンウィークが10連休となることが決まり、日耳鼻総会・学術講演会の参加者数が激減するのではないかと思うと、肩の荷がいきなり3倍になりました。しかし、その心配は杞憂に終わり、4,460名もの参加者を得ることができました。また、学会の総指揮、会長講演、懇親会での空手の演武とここでも一人三役を演じることになりましたが、とても充実した4日間でした。これもひとえに物心両面で多大なるご支援を賜った同門会そして地方部会会員の皆様のお陰と、心より感謝申し上げます。

そして、今年は喜山敏志先生と藤原義宜先生の二人の専攻医と、昨年専門医を取得した有本一華先生が入局しました。温かいご指導をよろしくお願い致します。

平成の終わる年

山 本 誠

元旦は久しぶりにわが家で迎えた。毎年どこかで年初めをしていたが、12月31日に休日当番医に当たり、どこにも行けなかったからだ。以前の31日の当番医は1人体制で、多くの患者さんで大変だったが、2年前から2人体制となり、しかも年配者は夜間のオンコールが免除となったので、夜はちびちびやりながら、私にとっては最後の正月休みの当番医も無事終了したのも手伝って、「紅白歌合戦」や「ゆく年・くる年」を心ゆくまで楽しめた。ところで鹿児島市耳鼻咽喉科の日曜・休日当番やオンコールは70才で免除となるが、現在の医学会の平均年齢は約62才なので、今後の新規開業の減少、70才以上や閉院の増加を考慮すると、日曜・休日当番医制やオンコール体制の維持が困難になるのは喫緊の問題である。

今年が平成の最後の年であるが、世の中はますます不安定さを増し、米中の貿易戦争、英国のEU離脱問題、米朝交渉のゆくえ、トランプ大統領のロシア疑惑など目が離せない事象が山積です。日本にとっても米中の貿易摩擦は日本経済の下降要因になるし、日韓関係の悪化、さらに日本軽視の動きは個人的にも腹立たしいものであり、やるせない思いがつのります。韓国や中国の首脳が国民への点数稼ぎや、国民の目をそらすための日本たたきには辟易します。国内では安倍一強の自民党体制の強権政治も種々の面ではころびがみえており、毎月勤労統計調査の不正行為問題、働き方改革、憲法改正、10月からの消費税10%への引き上げなど、まだまだ内憂外患の状態です。このように平成31年が明けて、5月から新しい年号となるのに夢や希望も持てない期待薄の年となりそうですが、ただ民意が国を動かし、ゆく先を決めていくと言われていています。すばらしい指導者がいない現在、健全な民意が育ち、世界の平和へと進む事を願うばかりです。

私にとって平成はどうであっただろうか。昭和61年に開業して今年で33年となり、平成の31年間は開業医として過した。災害や人災の多い平成であり、学生時代を過した神戸も大震災に見舞われたが、幸いにも災害に合う事はなく、日々雑多な事に追われ、食べて、飲んで、遊んでと刹那的な生き方をしてきたが、何とかやってこられたのは周囲の方々の御尽力と御協力のお陰だと思えます。古希を迎えてこれからはいままでの御恩に報いるべく微力を尽くすつもりです。

昨年10月に江川俊治先生が逝去された。9月の江川雅彦先生主催の「匂いのシンポジウム」で俊治先生の体調が悪くて、透析を始められたと聞いた矢先の訃報に茫然自失しました。先生は私が入局した時はすでに開業されておられ、勝田先生のお伴で天文館の Snackbar でお会いしたのが最初でした。私が開業してからは県耳鼻咽喉科医学会の理事に

加えていただき、保険や医業運営、患者さんの対処方法などに関して種々のアドバイスや御指導を賜り、空港ゴルフコースでは一緒にプレーを楽しませてもらったり、あるスナックをオーム真理教の第7サティアンに例えて「第7サティアンに行こう」の合言葉にいろいろな人生説を聞かせてもらい、公私伴に大変お世話になりました。先生は昭和56年に鹿児島県耳鼻咽喉科医会の幹事になられ、中央との連絡責任者を兼任され、「医会だより」第1号を発行されたし、医会の組織化を推進されて現在の医会ができ上がりました。医会長も務められ、医会の発展に多大の貢献と尽力をいただいた事に深謝し、謹んで哀悼の意を表します。

同門会の先生方には昨年5月の宿題報告、さらに今年の日耳鼻総会主催に際して多大なる御支援をいただき、ありがとうございました。お陰様で黒野先生の宿題報告「上気道炎症の粘膜ワクチンによる制御」での抗生剤にたよらないpc（ホスホリルコリン）粘膜ワクチンの炎症制御と臨床応用は日耳鼻会員に多大の感銘と期待を与え、専門医講習会も滞りなく終了しましたが、日耳鼻総会が気がかりです。この原稿を書いているのは3月ですので、まだ日耳鼻総会は開催されておらず、大型連休直後の開催に加えて、会員の多くが専門医更新に必要な単位をおおかた取得しており、万難を排して学会に参加する事がないと思われるので、日耳鼻総会の参加者が大きく減少する事が懸念されます。これをお読みの頃は結果は判明していますが、総会の成功を祈念しております。

せんだい耳鼻咽喉科 内 菌 明 裕

<総説>

内菌明裕：肺炎球菌迅速検査をどのように活用するのか？特集. 子どもの中耳炎 Q&A.
MB ENT224：27-34, 2018.

<学会・講演>

栄養療法セミナー 平成30年1月28日（鹿児島市）

「治りにくい耳鼻咽喉科疾患と栄養状態との関連性

～めまいと頭痛 鉄・亜鉛とVB群～」

第25回 日本東洋医学会鹿児島県地方部会 平成30年2月18日（鹿児島市）

テーマ別研究会「エキス剤の使い方」

「顔面神経麻痺・突発性難聴に対する加味八仙湯方意のエキス剤合方の有用性」

鹿児島臨床漢方研究会 平成30年5月24日（鹿児島市）

「首から上の愁訴に対する漢方治療」

第24回南九州上気道感染症臨床懇話会 平成30年6月21日（鹿児島市）

「小児反復性中耳炎における問題点について - 抗生剤の適正使用をめぐって -」

第34回 日本耳鼻咽喉科漢方研究会 学術集会 平成30年10月28日（東京）

「四逆散投与群の栄養学的背景」

第32回日本耳鼻咽喉科学会専門医講習会 平成30年11月18日（福岡市）

実技講習28（36） - 外来でできる細菌・ウイルス迅速検査 -

最近、読みたい書物はタブレットで読んでいます。医療界でもまさにパラダイムシフトと呼ぶべき事象が次々に起こってきていますが、中でも衝撃的なのが「アルツハイマー病の真実と終焉」（テール・プレデセン著 白澤 卓二監訳）です。これまで治ることのない進行性不治の病と考えられていたアルツハイマー病をすでに1000例近くも治したという奇跡のプログラムを開発した医師たちの記録であり、その実践法を紹介した本です。従来、この病気は、脳にアミロイドβが蓄積して、シナプス間伝達が壊れて次第に認知機能が失われていく病気と理解されていますが、この物質がどういうメカニズムで蓄積するのかが解明されていませんでした。著者らのグループは、このメカニズムが単独ではなく、現時点で、36種類の原因で起こっている事を解明したとしています。そうして、これらをつぶしていくプログラムを完成させました。彼らは、その研究から

このように言っています。「もう誰もアルツハイマー病で死なせない」

彼らの考え方ややり方は、従来の上からの研究によって医師に広がる方法ではなくて、大規模臨床研究を認めようとしなかったFDAや資金援助を打ち切った資金支援団体に立ち向かい、実際の臨床経験から次第に拡散していき、全米で追試が広がっています。日本へもじきにその波が押し寄せるのでしょうか。是非そうあって欲しいと心から願っています。

ふくいわ耳鼻咽喉科クリニック 福 岩 達 哉

<原著>

福岩達哉：LEAP 診察室 vol.146 「頭痛を起こす鼻の病気」

月刊 LEAP 2018年7・8月号, p49.

福岩達哉：診療つれづれ「医院経営におけるストレス対策」

JOHNS vol.35 N0.2 p252-254, 2019.

1. 共催の講演会

第22回南九州上気道感染症臨床懇話会 平成30年 6月21日

一般演題：「小児反復性中耳炎における問題点について」

せんだい耳鼻咽喉科 院長 内菌 明裕 先生

特別講演：「難治性中耳炎の治療戦略～滲出性中耳炎の話題を含めて～」

自治医科大学附属病院 とちぎ子ども医療センター

小児耳鼻咽喉科 教授 伊藤 真人 先生

第114回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成31年 1月31日

特別講演：「花粉症治療の最新トピックス」

日本医科大学大学院 医学研究科 頭頸部・感覚器化学分野

教授 大久保 公裕 先生

第115回鹿児島県耳鼻咽喉科学術集会 平成31年 2月21日

特別講演：「鼻アレルギーの診療 Up To Date ～免疫療法を中心に～」

山梨大学大学院 総合研究部 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学

教授 増山 敬祐 先生

2. 第21回さくらじまフォーラム

本フォーラムは、平成30年12月13日にサンロイヤルホテルで開催された。一般演題として「当初扁桃周囲膿瘍を疑われた2例」を鹿児島大学の松元隼人先生に、「胸部痛、開口障害、複視を訴えた上顎骨破壊症例」を鹿児島市立病院の林多聞先生に、「耳下腺外に病変のある耳前部疾患」を鹿児島医療センターの西元謙吾先生に発表して頂いた。いずれの症例も病歴だけではなかなか診断が思い浮かばないような疾患で、大変興味深く拝聴した。領域講習では、奈良県立医科大学の北原紘教授が「超高齢社会のめまいの80%以上を何とかする方法」と題して講演された。演題名のとおり非常に好奇心を掻き立てられる良性発作性頭位めまい症についての新しい知見を拝聴することができた。日常診療における症例を多施設の先生方と気軽に意見交換できる貴重な機会であり、本フォーラムの更なる発展を願う。

(文責：川島雅樹)

3. 第17回「鼻の日」市民講座

日時：平成30年8月6日（土）

場所：プラザN4階ヴァリエホール（鹿児島市武1-4-2）

講演内容：

司会 鹿児島大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科 川島雅樹

1. 鼻出血の対処法

鹿児島大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科 牧瀬高穂

2. においと嗅覚障害

鹿児島大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科 川島雅樹

3. 舌下免疫療法とは？

鹿児島大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科 地村友宏

上記のテーマについてわかりやすく解説され、盛会であった。

（文責：川島雅樹）

4. 第12回耳の日ならびにアレルギー週間公開講座 報告

日程 平成31年2月23日（土） 13：00～14：10

場所 鹿児島市勤労者交流センター 第1会議室

本年度は、以下の内容で講演を行いました。講演終了後は、多くの質問があり、出席者の難聴、補聴器、アレルギーに対する並々ならぬ関心の高さを感じました。今後も多くの方に、耳鼻咽喉科疾患について興味を持って頂けるよう広報活動を続けていきたいと思えます。

講演

1. 聞けば納得！やさしく解説します 聞こえのしくみと働き 宮之原 郁代
（鹿児島大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

2. もう迷わない！補聴器の選び方・使い方 大堀 純一郎
（鹿児島大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科）

3. その症状 ... もしかしてアレルギー性鼻炎？

牧瀬 高穂

(鹿児島大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科)

アンケート結果

(平成31年2月23日) 参加人数32名 回収数 31枚

30代 1名 50代 1名 60代 8名 70代 11名 80代 10名
 女性 11名 男性 15名 無回答 5名

1. どのようにして、今回の講座について知りましたか。

新聞 13名 病院内のポスター 0名 案内のハガキ 17名
 リビングかごしま 1名

2. どの講演を目的に受講しましたか。※重複回答あり

聞こえのしくみと働き 17名 補聴器 13名 アレルギー性鼻炎 17名

3. 講演を聴こうと思ったきっかけは？※重複回答あり

聞こえに不自由を感じているから 14名 自分の健康管理 19名
 家族の病気を心配して 6名

4. 講演内容はいかがでしたか。

わかりやすかった 22名 ややわかりにくい 2名 無回答 7名

5. これまでに参加されたことはありますか？

はじめて 10名 2回目 5名 3回目以上 16名

(文責：宮之原 郁代)

黒野 祐一

2019年5月8日（水）から5月11日（土）までの4日間、第120回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会をリーガロイヤルホテル大阪ならびに大阪国際会議場（グランキューブ大阪）で開催いたしました。昨年の第119回日耳鼻総会時に学会創立125周年記念式典が執り行われ、その長い歴史のある



本学会において初めてとなる会長の所在地とは遠く離れた大都市での開催となり、さらに本年5月1日に元号が平成から令和へと変わり、新たな時代の幕開けといえる記念すべき学会になりました。しかし、改元のため学会開催直前の5月6日（月）までの10日間が連休となり、休み明けの診療に追われて参加者が少ないのではないかと危惧されましたが、その心配は杞憂に終わり、医学生や臨床研修医を含めて4,460名の参加を得ることができました。

5月8日（水）は理事会ならびに定時社員総会などの各種会議、そして代議員懇親会をリーガロイヤルホテル大阪で開催しました。この会議中にも何か鹿児島の雰囲気を感じたいと考え、休憩時間の茶菓子を恒例のショートケーキに代えて鹿児島の銘菓を取り揃えてお出ししたところ、とても好評でした。

5月9日からの学術講演は大阪国際会議場で開催し、第118回から行われるようになった開会式では、開会の辞、森山 寛理事長のご挨拶、今年設立された日耳鼻研究奨励賞の授賞式、これまでは定時社員総会時に行われていた会長への感謝状贈呈式、SPIO Award 授賞式および受賞講演を行いました。そして開会式に続いて開いたウエルカムコンサートでは1,000名近い参加者で会場が満たされ、その演奏に対しても盛大な拍手をいただき、期待以上の好スタートを切ることができました。

今回の特別企画は、「日耳鼻学術講演会・講習会ならびに関連する学会のあり方などのワーキンググループ」の答申に従い、多彩なプログラムを組み多様化する会員の幅広いニーズに応えることを目指して、3つの宿題報告、会長講演、2つの特別講演、10のシンポジウム、7つのパネルディスカッション、3つの共通講習、国際シンポジウムを含む13の学術講演、7つの教育セミナー、6つのモーニング手術手技セミナー、そして

25のランチョンセミナーとハンズオンライブセミナー1つとかつてない数多くのプログラムを組みました。そのため本学会では初めてとなるICカードによる単位取得における混乱が懸念されましたが、何ら遅滞なく入退場の誘導ができました。

宿題報告は島根大学の川内秀之教授に「鼻副鼻腔炎症病態の制御に向けた免疫薬理学的アプローチ」、神戸大学の丹生健一教授に「頭頸部がんの最適化医療－根治とQOLの両立を目指して－」、聖マリアンナ医科大学の肥塚 泉教授に「超高齢社会におけるめまいと平衡障害への対応」と題してご講演いただきました。いずれもそれぞれの分野のリーダーである各教授が長年取り組んでこられた研究の成果と最新の知見を披露していただき、会場を埋め尽くした参加者全員が感銘を受けられたことと思います。

シンポジウムとパネルディスカッションは、新たな試みとして日耳鼻の関連する学会にテーマと演者を推薦してもらい、それらを領域講習として組み入れ、シンポジウムでは、アテネオリンピック競泳銅メダリストの中西悠子選手を招待しての「スポーツと耳鼻咽喉科」、延世大学のKim教授を交えた「ロボットおよび経口的頭頸部腫瘍手術の現状と展望」、「耳鼻咽喉科としての認知症への対応」などを、パネルディスカッションでは、ニューサウスウェールズ大学のHarvey教授をパネリストに加えた「内視鏡下鼻内副鼻腔手術の基本的な手技とその応用」、「耳鼻咽喉科診療における感染対策」などを行いました。当初、これらを並列で実施すると参加者数に偏りが生じるのではないかと案じられましたが、どの会場も多くの参加者で埋め尽くされ、安堵するとともに確かに会員のニーズが多様化していることを実感しました。

特別講演1は、日本免疫学会理事長の清野 宏教授に「粘膜免疫学創生から未来型ワクチン開発へ」と題して、粘膜免疫研究の臨床応用とくにナノゲルを用いた新規経鼻ワクチンについてお話いただきました。特別講演2は、JAXA 鹿児島宇宙センターの藤田 猛所長による「日本のロケット～その歩みとこれから～」と題して夢のあるご講演を賜りました。数日前にこの宇宙センターから打ち上げられた「はやぶさ2」が小惑星リュウグウへの衝突装置運用に成功したと報じられたこともあり、会場はほぼ満席になりました。その他、会長講演では



「扁桃周囲膿瘍の病態と治療のエビデンス」と題して講演させていただきました。最終日の午後には、「iPS細胞研究の倫理」、「医療安全への2つのアプローチ：Safety-I & Safety-II」、「感染症の病態から考える適正抗菌薬使用」の共通講習を行いました。

学術講演も関連する学会の協力を得て、「メニエール病の診断と治療」,「好酸球性副鼻腔炎の診断と治療」などを行い,国際シンポジウムでは韓国,台湾そして我が国の新進気鋭の先生らによって最先端の情報が紹介されました。これらのプログラムもすべて並列で行いましたが,どの会場も盛況で活発な討論がなされました。

教育セミナーは「難聴の診療におけるピットフォール」,「上気道感染症に対する抗菌薬の選択とそのエビデンス」などを,若手頭頸部外科医を対象としたモーニング手術手技セミナーでは「甲状腺手術」や「頸部郭清術」などに関する講演を行いました。また,ランチョンセミナーでは「耳鼻咽喉科感染症に対する薬剤耐性(AMR)対策」,「アレルギー性鼻炎治療における抗ヒスタミン薬の最新情報」などを,そしてハンズオンライブセミナーはHarvey教授にコメントをいただきながら実施しました。

一般演題578題のうち口演は教育セミナーと並列で実施しましたが,すべてが興味深い演題で,どの会場も多くの参加者で満ちていました。また,ポスター会場では,今回が初めての使用となる指向性スピーカーを設置したところ,近接するブースの声があまり気にならなかったと好評でした。

学術講演以外の企画として,恒例となった医学生・臨床研修医のためのセッションとハンズオンレクチャーには252名の参加があり,ビールに加えて3Mと称される薩摩焼酎を振舞った懇親会も大いに賑わいました。また,機器展示会場におけるブースセミナーには15社から申し込みがあり,鹿児島名物の「しろくま」効果もあってか,予想以上の参加者がありました。昨年に続いて開催した駅伝大会には17チームが参加し,前会長の山唄達也教授が率いる東大医局チームが優勝しました。会員懇親会では「霧島九面太鼓」の演奏や空手の演武を披露し,全国和牛チャンピオンに輝いた鹿児島黒牛を味わっていただくとともに鹿児島県庁とリーガロイヤルホテル大阪の協力を得て「かごしまフェア」を開催するなど,鹿児島のPRもさせていただきました。このように本総会・学術講演会を恙なく終えることができたのも偏に,ご参加いただいた会員の皆様と森山理事長をはじめとする役員各位のご指導とご協力の賜物と心より感謝申し上げます。来年は岡山市で西崎和則会長のもとで開催されます。より多くの先生方にご参加いただき,さらに盛会になることを祈念申し上げます。

(日耳鼻2019年122巻8号「専門医通信」掲載文より引用改変)





懇親会の司会をして

大 堀 純一郎

この度、日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会 会員懇親会の司会をさせていただきました。会員懇親会の開場では、霧島九面太鼓保存会による太鼓の演奏に導かれて会員が、懇親会に入場するという少し変わった趣向を凝らしておりました。その後霧島九面太鼓の「天孫降臨」の演奏の終了とともに懇親会を開会いたしました。大勢の会員の前での司会に少し緊張しましたが、偉い人の名前を間違えることなく無事終了することができました。また鏡開きの声掛けをするという最初で最後となるであろう貴重な体験をさせていただきました。次期総会会長の西崎先生の乾杯のタイミングが難しく、司会として十分な働きができないことが反省点です。会員の皆様には大変喜んでいただけたようで司会の中締めという言葉をかけるのが心苦しかったです。このような場で司会という大役を任せていただき感謝いたします。



駅伝企画を担当して

駅伝担当：永野 広海

この度の第120回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会の期間中の5月10日金曜日に大阪城公園にて会員の親睦を目的とした駅伝企画が開催されました。幸い晴天にも恵まれ20チーム、60名の御参加を頂きました。種目は、個人戦（約1km）と団体戦（約2km×3名）を行いました。幅広い年齢でも参加しやすいように団体戦では、チーム内の参加者の年齢合計が大きいチームからスタートする方式を採用しました。結果は東大医局チーム、二位は兵庫医大チーム、三位は大阪急性期・総合医療センターでした。我々鹿児島大学は個人戦で福添選手が、3位に入賞しメダルを授与されました。

幸いにけが人や急病人を出すこともなく無事に終了しました。

来年は岡山大学が総会を担当するため、岡山市内で開催される場合には、是非とも団体での入賞を目指したいと思います。

大会の開催に際して、参加されたチームの選手の方々、学会サービスの中本寛二様、多数の御助言を頂きました大阪医科大学耳鼻咽喉科寺田哲也先生にこの場を借りてお礼申し上げます。



全体集合写真



松元隼人選手



空手部：福添選手（個人戦3位）

第119回日本耳鼻咽喉科学会総会での宿題報告に対し、会員の皆様から、多大なるご寄付を賜りました。以下にご寄付頂きました先生方を掲載いたします（敬称略、あいうえお順）。

ご支援に対して心より感謝申し上げます。

朝隈 真一郎	大堀 八洲一	田中 紀充	福山 聡
飯田 富美子	小川 和昭	谷本 ゆかり	分藤 準一
井内 寛之	小川 敬	谷本 洋一郎	牧瀬 高穂
石川 勉	鹿島 直子	鶴丸 耀久	間世田 佳子
市川 大輔	川島 雅樹	鶴丸 浩士	松岡 秀隆
伊東 一則	久徳 貴之	出口 浩二	松崎 勉
伊東 小都子	清田 隆二	徳重 栄一郎	松永 信也
伊東 祐久	黒木 幸一	永野 広海	松根 彰志
今給黎 泰二郎	河野 もと子	中村 誠	松元 隼人
今村 洋子	児玉 公彦	新納 えり子	松山 勝哉
岩下 睦郎	斉藤 寿	西園 浩文	松山 博文
岩坪 哲治	坂本 邦彦	西元 謙吾	宮崎 康博
岩元 光明	鮫島 篤史	昇 卓夫	宮下 圭一
上野 員義	篠原 真樹子	橋本 眞実	宮之原 郁代
牛飼 雅人	地村 友宏	花牟禮 豊	宮本 佑美
内藪 明裕	下麥 哲也	濱崎 喜與志	森園 健介
馬越 瑞夫	杉原 純次	林 多聞	森山 一郎
江川 雅彦	鈴木 晴博	原口 兼明	柳井谷 巧
大野 郁夫	関 大八郎	原田 みずえ	山本 賢之
大野 聖	積山 幸祐	平瀬 博之	山本 誠
大野 文夫	高木 茂	深水 浩三	吉福 孝介
大野 政一	高木 実	福岩 達哉	渡邊 莊郁
大堀 純一郎	豎山 俊郎	福島 泰裕	

第120回日本耳鼻咽喉科学会総会主催に対し、会員の皆様から、多大なるご寄付を賜りました。以下にご寄付頂きました先生方、ご施設を掲載いたします（敬称略、あいうえお順）。

ご支援に対して心より感謝申し上げます。

朝隈 真一郎	小川 敬	田中 雅代	牧瀬 高穂
飯田 富美子	鹿島 直子	谷本 ゆかり	間世田 佳子
井内 寛之	唐木 敦子	谷本 洋一郎	松岡 秀隆
石井 祐司	川畠 雅樹	田淵 みな子	松崎 勉
石川 勉	貴島 徳昭	茶園 篤男	松崎 尚寛
伊東 一則	久徳 貴之	鶴丸 耀久	松永 信也
伊東 小都子	清田 隆二	鶴丸 浩士	松根 彰志
伊東 祐久	黒木 幸一	出口 浩二	松元 隼人
今給黎 泰二郎	河野 もと子	徳重 栄一郎	松山 勝哉
今村 洋子	児玉 公彦	永野 広海	松山 博文
岩下 睦郎	小松原 幸子	中村 誠	宮崎 康博
岩坪 哲治	斉藤 寿	新納 えり子	宮下 圭一
岩元 正広	坂本 邦彦	西園 浩文	宮之原 郁代
岩元 光明	鮫島 篤史	西元 謙吾	宮本 佑美
上野 員義	篠原 真樹子	昇 卓夫	村野 健三
植山 茂宏	島 哲也	橋本 眞実	森園 健介
牛飼 雅人	地村 友宏	花牟禮 豊	森山 一郎
内藺 明裕	下藺 政巳	濱崎 喜與志	柳井谷 巧
馬越 瑞夫	下麥 哲也	林 多聞	山本 賢之
江川 雅彦	杉原 純次	原口 兼明	山本 誠
大野 郁夫	鈴木 晴博	原田 みずえ	吉田 重彦
大野 聖	関 大八郎	一氏 佳代子	吉次 政彦
大野 文夫	積山 幸祐	平瀬 博之	吉福 孝介
大野 政一	高木 茂	深水 浩三	渡邊 莊郁
大堀 純一郎	高木 実	福岩 達哉	
大堀 八洲一	豎山 俊郎	福島 泰裕	
小川 和昭	田中 紀充	福山 聡	

医療法人 健幸会 天辰病院
 公益財団法人 慈愛会 今村総合病院
 鹿児島県厚生連病院

医療法人 玉昌会 加治木温泉病院
 社会医療法人義順顕彰会 種子島医療センター
 医療法人 豊泉会 豊永耳鼻咽喉科医院

平成31年 鹿児島大学大学院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 同門会

本年の同門会は、平成31年1月19日に城山ホテル鹿児島で開催された。本年は特別講演として熊本大学耳鼻咽喉科 折田先生に「頭頸部腫瘍治療におけるトピックスと工夫」と題して講演いただいた。また今回の同門会では、本年当教室で学位を取得した宮下先生が、「ホスホリルコリン経鼻投与によるアレルギー性鼻炎発症の抑制」、永野先生が「ホスホリルコリン経皮免疫による上気道粘膜免疫応答の誘導」として学位取得報告をした。一般演題では、原田先生が、「鼻閉に対する内視鏡下手術の検討」として厚生連病院での鼻科手術に関する報告を行い、積山先生が「高度肥満患者に対する気管切開術」として鹿児島生協病院の症例を報告した。また井内先生が、「Weekly 高用量シスプラチン併用放射線化学療法の臨床的検討」として、鹿児島大学病院、鹿児島医療センター、鹿児島市立病院の3施設の症例を用いた検討を報告した。

同門会として今後も県内の臨床における報告を積極的に行い、同門会の活性化を行っていききたい。また当教室の学位取得者が増えることは喜ばしいことであり、今後もこのような報告ができればよいと考えている。また本年は、松崎尚寛先生を同門会に迎え入れることができた。同門会メンバーが今後も増えていき新しい風を迎え入れることで、さらなる同門会の発展を期待したい。なお2019年の第120回日耳鼻総会は当教室が主催となっており、同門会の皆様からの多大なご支援に関してこの場を借りて深謝したい。

(文責：大堀純一郎)



鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室同門会 平成31年1月19日 於：城山ホテル鹿児島

【対象地域】

鹿児島市，阿久根市，垂水市，西之表市，屋久島町，財部地域（曾於市）
大崎町，輝北地区（鹿屋市）

【受診者数】

小学生 3,231名，中学生 1,745名

【対象疾患】

耳垢栓塞，滲出性中耳炎，慢性中耳炎，鼻中隔彎曲症，鼻アレルギー，慢性鼻炎，慢性副鼻腔炎，慢性扁桃炎，扁桃肥大の9疾患

【結果】

疾患別の有病率はここ数年の傾向と変わらず，アレルギー性鼻炎が圧倒的に多く，慢性副鼻腔炎，耳垢栓塞の順であった（図1）。学年別の耳疾患有病率は低学年を中心に耳垢栓塞が多かったが，昨年と比較すると滲出性中耳炎がやや多かった（図2）。学年別鼻疾患有病率は学年毎に大きな差はなかった（図3）。学年別扁桃疾患に関しては，昨年小学6年生で多く認めた扁桃肥大は，そのまま中学1年生で多く見られたことに加え，慢性扁桃炎も多く見られた。また，昨年の検診では小学1年生で扁桃肥大を多く認めていたが，本年は小学2年生においては扁桃肥大の指摘はなかったようであった（図4）。

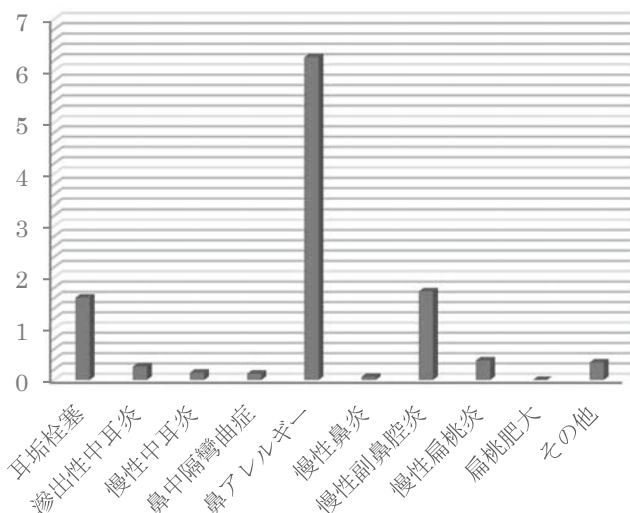


図1. 疾患別の有病率

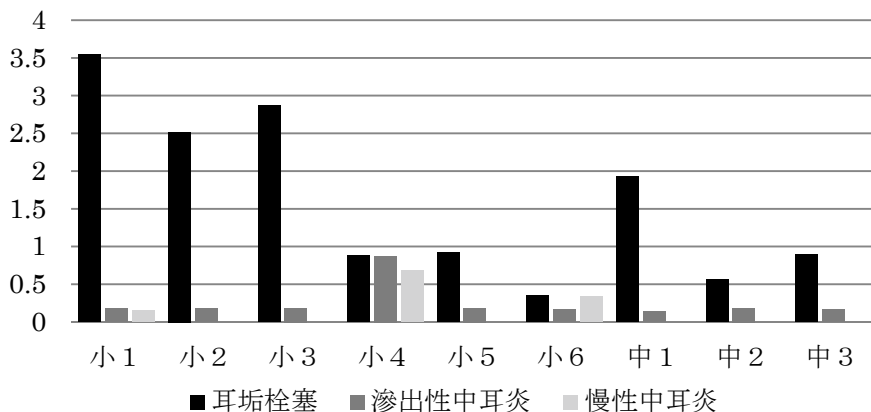


图2. 学年別耳疾患有病率

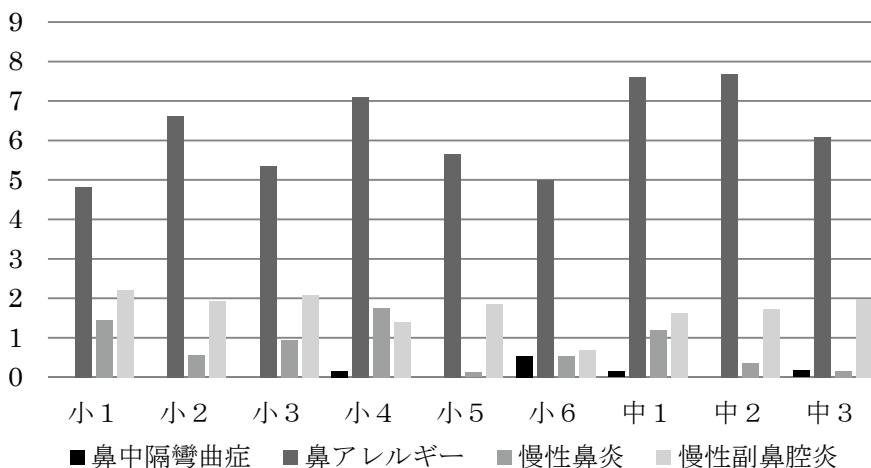


图3. 学年別鼻疾患有病率

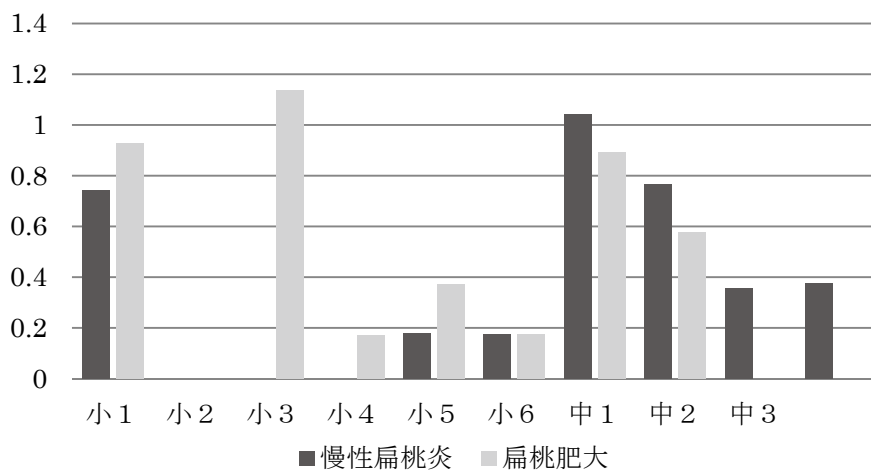


图4. 学年別扁桃疾患有病率

難聴・耳鳴・めまい外来

宮之原 郁 代

いつも貴重な症例をご紹介頂きありがとうございます。

例年に引き続き、小児・成人難聴の精査、難聴の遺伝子診断、人工内耳候補者選定、術後の（リ）ハビリテーション、補聴器フィッティング、TRT療法、めまいの精査・リハビリとできるだけ幅広く、をこころがけ対応しています。

小児難聴に関しては、ハイリスク症例の難聴精査、新スク後の精査、化学療法前後の聴覚評価ならびに言語発達遅滞児の聴覚精査などに対応しています。1歳未満のABR症例は18例、1-3歳で14例でした。

成人難聴の症例は、コンスタントにご紹介をいただいています。遺伝学的検査を目的に来院される患者さんも多くなりました。遺伝カウンセリングを行いながら精査を進めています。厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業）「難治性聴覚障害に関する調査研究班（研究代表者 宇佐美真一）」へ本年度も参加し、平成31年度からは「若年発症型両側性感音難聴」、「アッシャー症候群」、「ミトコンドリア難聴」の3疾患に加え、「遅発性内リンパ水腫」の疫学研究も進めていくことになりました。つきましては、これまで以上に患者様のご紹介につきご高配頂けましたら幸いに存じます。

表1では、補聴器フィッティングが例年に比較して多い印象ですが、これは「TRT療法目的で来院されたものの、難聴があることが判明し補聴器を選択した」患者さんが多かったことを反映していると思われます。総検査件数は、例年とほぼ同様の傾向でした。診療、研究だけでなく、教育施設としての役割も念頭に、今後もさまざまな疾患、病態に対処していけるよう研鑽を重ねていきたいと思えます。引き続きどうぞ宜しくお願いします。

表. 各外来・検査件数

	ABR	補聴器外来	耳鳴外来 (TRT療法)	遺伝学的検査 (先天性難聴)	前庭機能検査
2016年	78	17	13	12	92
2017年	73	29	13	5	42
2018年	77	36	6	8	67

(前庭機能検査は件数, 他は新患者数)

VII. 病理集計

病理集計

入院	381
外来	335
他院（対診）	22
総施行件数	716

2018.4月～2019.1月

部位	悪性	件	良性	件
外耳	SCC	5	cholesteatoma	7
	ACC	1	nevus cell nevus	2
			spindle cell tumor	1
鼻腔	SCC	6	inverted papilloma	5
	malignant melanoma	1	schneiderin papilloma	3
	Adenosquamous carcinoma	1	squamous cell papilloma	1
	Inverted papilloma with carcinoma in situ	1	hemangioma	2
	T-cell lymphoma	1	verruca vulgaris	1
	malignant lymphoma, B cell type	1		
前頭洞			inverted papilloma	1
			schneiderin papilloma	2
篩骨洞	langerhans cell histiocytosis	1	inverted papilloma	1
上顎洞	SCC	1	odontogenic myxoma	1
	malignant lymphoma(DLBCL)	1	inverted papilloma	2
蝶形骨洞	SCC	1		
舌	SCC	6	squamous cell papilloma	1
	malignant lymphoma(DLBCL)	1		
口腔底	SCC	3	dermoid cyst	1
臼後部	SCC	2		
歯肉	SCC	4	ameloblastoma	2
硬口蓋	SCC	1		
上咽頭	SCC	1		
	malignant lymphoma(DLBCL)	2		
	metastasis of clear cell renal cell carcinoma	1		
中咽頭	SCC total	20	squamous cell papilloma	7
	p16-positive	7		
	p16-negative	10		
	p16-unclear	3		
	malignant lymphoma(DLBCL)	4		
下咽頭	SCC	26	squamous cell papilloma	2
喉頭	SCC	30	squamous cell papilloma	3
	malignant lymphoma(DLBCL)	1	laryngeal amyloidosis	2
耳下腺	mucoepidermoid carcinoma	4	pleomorphic adenoma	13
	malignant lymphoma (DLBCL)	1	warthin tumor	14
	MALToma	1	schwannoma	2
			basal cell adenoma	2
			lipoma	1
顎下腺	SCC	2	pleomorphic adenoma	3
	MALT lymphoma	1		
小唾液腺			IgG4-related disease	2
甲状腺			adenomatous goiter	6
	papillary carcinoma	4	follicular adenoma	1
頸部	SCC	1	lipoma	4
	ATLL	1		
	malignant peripheral nerve sheath tumor	1		
頸部リンパ節	metastasis of squamous cell carcinoma	16	IgG4 related disease	1
	metastasis of Papillary carcinoma	8		
	metastasis of invasive urothelial carcinoma	1		
	metastasis of carcinoma	5		
	malignant lymphoma(DLBCL)	1		
鎖骨上窩	classic Hodgkin lymphoma	2		

VIII. 手術実績

平成30年度 手術内訳と件数 (208年4月～2019年3月)

	全身麻酔	382件			
	局所麻酔	59件			
	合計	441件			
耳	鼓膜形成術	3	喉頭	喉頭微細手術	31
	鼓室形成術	10		喉頭悪性腫瘍摘出術	4
	乳突削開術	3		喉頭直達鏡検査	3
	顔面神経減荷術	2		誤嚥防止手術	1
	外耳道腫瘍摘出術	3			
	外耳道異物摘出術	1	甲状腺	甲状腺良性腫瘍切除術	6
	耳瘻管摘出術	3		甲状腺悪性腫瘍切除術	4
	鼓膜チューブ留置	11		副甲状腺悪性腫瘍切除術	1
		22			
鼻	鼻内視鏡下副鼻腔手術	68	唾液腺	耳下腺腫瘍摘出術	22
	鼻中隔矯正術	6		顎下腺腫瘍摘出術	7
	眼窩底骨折整復術	1		舌下腺摘出術	1
	鼻出血止血術 (全麻)	3			
	鼻副鼻腔腫瘍切除術	6	頸部	頸部郭清術	22
	鼻骨骨折整復術	1		気管切開術	16
	粘膜下鼻甲介切除術	3		リンパ節摘出術	21
	上顎全摘術	1		頸部腫瘍摘出術	3
		頸部膿瘍切開排膿術		2	
口腔	舌悪性腫瘍切除術	3	再建	遊離空腸再建	7
	口腔底悪性腫瘍切除術	1		前腕皮弁再建	3
	硬口蓋悪性腫瘍切除術	1		大胸筋皮弁再建	3
	口腔良性腫瘍摘出術			DP皮弁再建	2
咽頭	両側口蓋扁桃摘出術	71	合計		441
	食道直達鏡検査	10			
	下咽頭悪性腫瘍摘出術 (経口)	7			
	下咽頭悪性腫瘍摘出術 (咽喉食摘)	10			
	中咽頭腫瘍摘出術	13			
	咽頭外瘻閉鎖術	2			
	アデノイド切除術	17			
	過長茎状突起切除	1			

(平成31年3月現在)

文部科学省科学研究費

基盤研究 (C)

- ①ホスホリルコリンの二相作用を応用した新たな粘膜ワクチンの開発
研究代表者 黒野 祐一 (16K11239)
- ②粘膜免疫応答誘導型経皮ワクチンの開発
研究代表者 永野 広海 (16K11238)
- ③インフルエンザウイルス感染症の生体肺イメージング解析技術の開発とその応用
研究代表者 福山 聡 (16K08806)
- ④鼻咽腔関連リンパ組織 (NALT) の免疫記憶機能を応用した新規粘膜ワクチンの開発
研究代表者 大堀 純一郎 (17K11389)
- ⑤ホスホリルコリン経鼻免疫追加によるあらたな肺炎球菌ワクチン接種プログラムの開発
研究代表者 間世田 佳子 (17K11335)
- ⑥ Toll 様受容体リガンドを用いた自然免疫作動型感染症予防・治療薬開発に関する研究
研究代表者 馬越 瑞夫 (18K09322)
- ⑦ホスホリルコリンによる細菌感染とアレルギー性炎症の制御に関する研究
研究代表者 川畠 雅樹 (18K16847)

若手研究 (B)

- ホスホリルコリン舌下投与によるアレルギー性鼻炎の制御機構に関する研究
研究代表者 牧瀬 高穂 (17K16929)

日本医療研究開発機構 (AMED)

- 粘膜免疫誘導型インフルエンザワクチンの開発に向けた研究
研究開発代表者 長谷川 秀樹 (国立感染症研究所)
研究開発分担者 黒野 祐一

1. 原 著

- (1) 川畠雅樹, 馬越瑞夫, 松元隼人, 永野広海, 大堀純一郎, 黒野祐一
下極型扁桃周囲膿瘍の臨床的特徴
日本口腔・咽頭科学会 31(2): 187-192, 2018
- (2) 宮本佑美, 永野広海, 黒野祐一
上咽頭に発生した多形腺腫例
耳鼻臨床 111(7): 469-476, 2018
- (3) 井内寛之, 宮下圭一, 大堀純一郎, 黒野祐一
中咽頭小細胞癌の1例
頭頸部癌 44(3): 300-304, 2018
- (4) 井内寛之, 伊東小都子, 松元隼人, 花牟禮 豊, 松崎 勉, 黒野祐一
3-Weekly 高用量シスプラチン併用放射線化学療法の臨床的検討
— 2 回目のシスプラチン投与に注目して —
頭頸部癌 44(3): 305-309, 2018
- (5) 大堀純一郎, 黒野祐一
口腔底類皮嚢胞
耳鼻臨床 111(12): 804-805, 2018
- (6) M Kobayashi, M Miyagawa, S Nishio, H Moteki, T Fujikawa, K Ohyama, H Sakaguchi,
I Miyanohara, A Sugaya, Y Naito, S Morita, Y Kanda, M Takahashi, K Ishikawa,
Y Nagano, T Tono, C Oshikawa, C Kihara, H Takahashi, Y Noguchi, Usami S.
WFS1 mutation screening in a large series of Japanese hearing loss patients: Massively
parallel DNA sequencing-based analysis.
PLoS One. 13(3):e0193359, 2018

- (7) 久徳貴之, 永野広海, 井内寛之, 地村友宏, 黒野祐一
咽後膿瘍を合併した不全型川崎病例
耳鼻咽喉科臨床 112(2): 103-108, 2019
- (8) J Ohori, T Jimura, Y Kurono
The role of phosphorylcholine-specific immune responses in the tonsils and peripheral blood on IgA nephropathy
Acta Otolaryngologica 138(12): 1099-1104, 2018
- (9) Y Maseda, J Ohori, N Tanaka, H Nagano, K Miyashita, Y Kurono
Mucosal and systemic immune response to sublingual or intranasal immunization with phosphorylcholine
Auris Nasus Larynx 45(2): 273-280, 2018

2. 総 説

- (1) 黒野祐一
特集・ネブライザー療法－治療効果を高めるコツ－
「急性鼻副鼻腔炎に対するネブライザー療法の手引き」について
MB ENT 219: 49-54, 2018
- (2) 大堀純一郎
特集・あなどれない扁桃・扁桃周囲病変の診断と治療
急性扁桃炎とその鑑別
MB ENT 220: 13-19, 2018
- (3) 黒野祐一
生涯教育シリーズ－94
わかりやすい感覚器疾患 II 感覚器症候のみかた 味覚・嗅覚
2 嗅覚障害
日本医師会雑誌 147特(2): 112-113, 2018

(4) **大堀純一郎**
降下性縦隔炎の現状と課題 耳鼻咽喉科領域（臨床）
日本気管食道科学会「専門医通信」56：15-20, 2018

(5) **黒野祐一**
特集 これだけは知っておきたい医療安全と感染制御
耳鼻咽喉科診療における感染対策の特徴
JOHNS 34 (10): 1451-1453, 2018

(6) **黒野祐一**
特集 今さら聞けないかぜの診療の ABC
《かぜを治す》高齢者のかぜと肺炎球菌ワクチン
耳鼻咽喉科・頭頸部外科 90(11): 964-967, 2018

3. 国内学会発表

(1) **特別講演**
第86回奈良県耳鼻咽喉科講習会 平成30年4月21日（奈良市）
「アレルギー性鼻炎の治療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」
黒野祐一

アレルギー Update 2018 in 九州－抗ヒスタミン薬を考える－
平成30年5月26日（福岡市）
「アレルギー性鼻炎の治療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」
黒野祐一

大分大学医学部臨床講義 平成30年6月11日（大分市）
「口腔・咽頭癌」
黒野祐一

第93回日耳鼻千葉県地方部会学術講演会 平成30年7月29日（千葉市）
「上気道炎症の粘膜ワクチンによる制御」
黒野祐一

島根大学医学部講義 平成30年8月29日（出雲市）

「鼻科領域の疾患と治療」

黒野祐一

第301回筑豊小児科医会勉強会 平成30年9月20日（飯塚市）

「アレルギー性鼻炎の診療における留意点」

黒野祐一

第8回江戸川・葛飾感染症ワークショップ 平成30年10月27日（東京都）

「急性重症上気道感染症の診療における留意点」

黒野祐一

第10回沖縄 Airway Conference 平成30年11月21日（那覇市）

「アレルギー性鼻炎の薬物療法における留意点と最新の話題」

黒野祐一

石川県耳鼻咽喉科医会学術講演会 平成30年11月29日（金沢市）

「アレルギー性鼻炎における抗ヒスタミン薬の位置づけ」

黒野祐一

HN seminar in Kagoshima 平成30年12月6日（鹿児島市）

「頭頸部がん治療の最適な治療戦略について」

宮下圭一

第10回日本高気圧環境・潜水医学会 中国四国地方会 平成30年12月15日（福山市）

「耳鼻咽喉科領域における高気圧酸素療法の位置づけ」

黒野祐一

東三学術講演会 平成31年1月16日（豊橋市）

「アレルギー性鼻炎の治療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」

黒野祐一

第2回北九州眼科アレルギー研究会 平成31年1月25日（小倉市）

「アレルギー性鼻炎診療に役立つ鼻の知識」

黒野祐一

第58回京滋臨床アレルギー懇話会 平成31年2月2日（京都市）

「アレルギー性鼻炎の治療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」

黒野祐一

角膜カンファランス2019

アレルギー疾患・最前線～診療科の枠を超えて～ 平成31年2月9日（京都市）

「上気道炎症の粘膜ワクチンによる制御－耳鼻咽喉科の立場から－」

黒野祐一

第27回九州アレルギー講習会 平成31年2月17日（福岡市）

「アレルギー性鼻炎の最近の話題」

黒野祐一

アレルギー Update セミナー in 九州 平成31年3月3日（福岡市）

「アレルギー性鼻炎に対する抗ヒスタミン薬の使い方」

黒野祐一

八幡耳鼻科医会講演会 平成31年3月7日（北九州市）

「アレルギー性鼻炎の治療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」

黒野祐一

熊本 AR（allergic rhinitis）学術講演会 平成31年3月23日（熊本市）

「アレルギー性鼻炎の治療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」

黒野祐一

宮崎市郡内科医会学術講演会 平成31年3月25日（宮崎市）

「アレルギー性鼻炎の治療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」

黒野祐一

(2) 教育講演

第67回日本アレルギー学会学術大会 平成30年6月22日～24日（千葉市）

「アレルギー専門制度を考える－耳鼻咽喉科の立場から－」

黒野祐一

第57回日本鼻科学会総会・学術講演会 平成30年9月27日～29日（旭川市）
 鼻科学会診療指針・ガイドラインセミナー
 「アレルゲン免疫療法診療指針」

宮之原 郁代

(3) ランチョンセミナー

第70回日本気管食道科学会総会ならびに学術講演会
 平成30年11月8日～9日（東京都）
 「アレルギー性鼻炎の診療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」

黒野祐一

(4) パネルディスカッション

第57回日本鼻科学会総会・学術講演会 平成30年9月27日～29日（旭川市）
 「高齢マウスにおける複合 DNA アジュバントによる免疫応答の再活性化」

川島雅樹

(5) 一般

第37回気道分泌研究会 平成30年4月7日（札幌市）
 「肺炎球菌およびインフルエンザ菌の上皮接着におけるホスホリルコリンの役割」
 井内寛之

第119回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会
 平成30年5月30日～6月2日（横浜市）

「肺炎球菌ワクチン接種後のホスホリルコリン経鼻追加免疫の効果（第2報）」

大堀純一郎，井内寛之，地村友宏，川島雅樹，永野広海，黒野祐一

「PspA 経皮ワクチンによる免疫応答の誘導」

永野広海，川島雅樹，大堀純一郎，牧瀬高穂，地村友宏，黒野祐一

「ホスホリルコリン（PC）とPC重合体（リピジュア）によるバイオフィルム形成の抑制」

川島雅樹，井内寛之，黒野祐一

第42回日本頭頸部癌学会 平成30年6月14日～15日（東京都）
 「咽喉食摘をおこない表在癌と診断された下咽頭癌症例の検討」（第2報）

大堀純一郎，宮下圭一，川島雅樹，永野広海，牧瀬高穂，馬越瑞夫，井内寛之

地村友宏, 黒野祐一

「上顎骨骨折部に生じた扁平上皮癌の2例」

川畠雅樹, 永野広海, 馬越瑞夫, 黒野祐一

第80回耳鼻咽喉科臨床学会総会・学術講演会 平成30年6月29日～30日(横浜市)

「レンパチニブが奏功した甲状腺乳頭癌の5症例」

地村友宏, 永野広海, 井内寛之, 馬越瑞夫, 原田みずえ, 牧瀬高穂, 川畠雅樹

宮下圭一, 大堀純一郎, 黒野祐一

「不全型川崎病に併発した咽後膿瘍の1例」

久徳貴之, 永野広海, 地村友宏, 黒野祐一

「びまん性大細胞型B細胞リンパ腫を合併した耳下腺 Warthin 腫瘍の1例」

松元隼人, 永野広海, 馬越瑞夫, 川畠雅樹, 宮下圭一, 黒野祐一

第13回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会

平成30年7月12日～13日(横浜市)

「小児睡眠時無呼吸症候群に対するアデノイド口蓋扁桃摘出術の治療効果」

宮下圭一, 黒野祐一

第33回日耳鼻九州連合地方部会学術講演会 平成30年7月14日～15日(別府市)

「下顎骨腫瘍として紹介された薬剤関連顎骨壊死の1例」

松元隼人, 吉福孝介, 西元謙吾, 松崎 勉, 黒野祐一

「菊池病の2例」

松崎尚寛, 吉福孝介, 西元謙吾, 松崎 勉, 黒野祐一

第6回日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会総会・学術講演会

平成30年9月7日～8日(金沢市)

「肺炎球菌およびインフルエンザ菌の上皮細胞接着に対するホスホリルコリン重合体の阻害効果」

井内寛之, 久徳貴之, 川畠雅樹, 黒野祐一

「菌原性深頸部膿瘍の臨床的検討」

久徳貴之, 井内寛之, 川畠雅樹, 大堀純一郎, 黒野祐一

第31回日本口腔・咽頭科学会総会ならびに学術講演会

平成30年9月13日～14日（名古屋市）

「良悪性の術前および術中診断を誤った耳下腺腫瘍の臨床的特徴」

川畠雅樹，井内寛之，永野広海，黒野祐一

「高用量シスプラチン併用放射線治療における臨床的検討」

井内寛之，馬越瑞夫，牧瀬高穂，川畠雅樹，永野広海，大堀純一郎，黒野祐一

伊東小都子，花牟禮 豊

第57回日本鼻科学会総会・学術講演会 平成30年9月27日～29日（旭川市）

「小児眼窩骨膜下膿瘍の1例」

積山幸祐，黒野祐一

「ホスホリルコリン舌下免疫によるアレルギー性鼻炎の抑制」

牧瀬高穂，大堀純一郎，黒野祐一

「ホスホリルコリン経鼻免疫応答におけるコレラトキシン poly (I:C) のアジュバント効果の相違」

地村友宏，大堀純一郎，永野広海，川畠雅樹，牧瀬高穂，黒野祐一

第28回日本耳科学会総会・学術講演会 平成30年10月3日～6日（大阪市）

「PCV13全身免疫後のホスホリルコリン経鼻追加免疫の効果」

大堀純一郎，黒野祐一

第63回聴覚医学会総会・学術講演会 平成30年10月17日～19日（神戸市）

「MYH14遺伝子変異による難聴症例の検討」

平松 憲，茂木英明，西尾信哉，荒井康裕，宮崎浩充，宮之原郁代，宇佐美真一

第70回日本気管食道科学会総会ならびに学術講演会

平成30年11月8日～9日（東京都）

「小児睡眠時無呼吸症候群に対するアデノイド・口蓋扁桃摘出術の効果」

宮下圭一，黒野祐一

第29回日本頭頸部外科学会総会ならびに学術講演会

平成31年1月24日～25日（仙台市）

「副咽頭間隙膿瘍に進展した扁桃周囲膿瘍に対する即時扁桃摘の有用性」

大堀純一郎，井内寛之，川畠雅樹，永野広海，黒野祐一

「Inflammation based prognostic score を用いた下咽頭癌の予後因子の検討」

井内寛之, 黒野祐一

第37回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会 平成31年2月7日～9日(大阪市)

「PCV13接種後のホスホリルコリン経鼻投与による免疫増強効果」

大堀純一郎, 川島雅樹, 永野広海, 黒野祐一

「再発性多発軟骨炎9症例の検討」

永野広海, 地村友宏, 川島雅樹, 大堀純一郎, 黒野祐一

「結合化ホスホリルコリン重合体の粘膜アジュバント効果」

地村友宏, 川島雅樹, 永野広海, 大堀純一郎, 黒野祐一

第1回日本アレルギー学会九州・沖縄支部地方会 平成31年2月16日(福岡市)

「ホスホリルコリンに対する血清中抗体活性とアレルギー性鼻炎の感作・発症リスクの関連性についての検討」

宮之原郁代, 大堀純一郎, 牧瀬高穂, 黒野祐一

「ホスホリルコリン舌下投与によるアレルギー性鼻炎の抑制効果」

牧瀬高穂, 大堀純一郎, 黒野祐一

第31回日本喉頭科学会総会・学術講演会

第42回日本嚥下医学会総会ならびに学術講演会

平成31年3月7日～9日(久留米市)

「咽喉頭脱分化型脂肪肉腫の経口的切除を施行した一例」

宮本佑美, 松元隼人, 永野広海, 黒野祐一

4. 国際学会発表

The 17th Japan-Korea Joint Meeting of Otorhinolaryngology-Head and Neck Surgery

Gwangju, Korea April. 6-8, 2018

「Transcutaneous immunization with pneumococcal surface protein A in mice」

H. Nagano, M. Kawabata, J. Otori, K. Miyashita, Y. Kurono, K. Fujihashi

「The clinical characteristics of inferior pole peritonsillar abscess」

M. Kawabata, H. Nagano, Y. Kurono

5. 学位論文要旨

総研第463号

Transcutaneous immunization with phosphorylcholine induces antigen-specific mucosal and systemic immune responses in BALB/c mice

（ホスホリルコリン経皮投与における全身および粘膜面にあたえる影響に関するマウスを用いた検討）

永野 広海

はじめに：近年、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌や多剤耐性緑膿菌などの薬剤耐性菌が蔓延し、また高病原性鳥インフルエンザの広域感染など、その予防と医療経済の観点からもワクチンの開発は急務である。ワクチンの投与経路には皮下注射などの全身投与と経鼻ワクチンや舌下ワクチンなどの経粘膜投与の2つが代表的であるが、期待されていた経粘膜投与の経鼻ワクチンでは顔面神経麻痺の有害事象が報告された。有害事象の少ない投与経路が模索されており、近年新たな投与方法として経皮ワクチンが注目されている。その特徴として、他の粘膜ワクチンと同様に接種時に痛みを伴わないこと、また血管が分布していない皮膚の表皮に限局して抗原を投与するため発熱やアナフィラキシーのような副作用が起こらないなどの特徴がある。我々も以前、他誌にCTを抗原とした経皮免疫による粘膜免疫応答に関して報告した。今回使用した抗原であるホスホリルコリン（以下PC）は、様々な細菌の細胞膜の表面に発現している構成成分であり、これに対する抗体産生を誘導できれば粘膜面において幅広い細菌感染を制御できるのではないかと考える。またワクチンは摂取後どの程度の期間抗体価維持できるかを知ることは、実地臨床での応用を見据えると必要となる。今回我々は、PCを用いた経皮免疫における血清や粘膜面における粘膜免疫応答に関して経時的な変化も踏まえ若干の文献的考察を踏まえて報告する。

対象と方法：実験動物として6週齢のBALB/cマウスを用いた。経皮投与群における抗原はPC（200 μ g/回）を用いて、除毛した背部皮膚に滴下した。コントロール群は、リン酸緩衝生理食塩水（Phosphate buffered saline：以下PBS）とCT（2 μ g/回）を背部皮膚に滴下した。免疫は、1回/週の頻度で6回施行した。最終免疫から1回/月ごとに6カ月後まで、血清中PC特異的IgM、IgG、IgA、唾液中のPC特異的IgAをELISA法にて測定し、経時的変化を追跡した。また最終免疫から6カ月後に血清中PC特異的IgGサブクラスの測定と摘出した脾臓よりCD4陽性細胞を分離72時間培養し上清中の

IFN- γ , IL-5, IL-4, IL-10, IL-12, IL-13をELISA法にて測定した。

結果：経皮投与群は、コントロール群と比較して最終免疫から6カ月後も血清中PC特異的IgGは有意 ($p<0.01$) に高値を維持した。一方で血清中PC特異的IgAは、5カ月後までは有意 ($p<0.01$) に高値であったものの、6カ月後には有意差 ($p>0.05$) はなくなった。唾液中のPC特異的IgAは、経皮投与群は6ヶ月後も有意差 ($p<0.01$) を認めた。血清中PC特異的IgGサブクラスの検討では、経皮投与群 ($p<0.01$) とコントロール群 ($p<0.01$) ともIgG1がIgG2aより有意に高値であった。またIgG1 ($p<0.01$), IgG2a ($p<0.01$) ともに経皮投与群が有意に高値であった。IL-4は、経皮投与群 (53.3 ± 3.11 pg/ml) がコントロール群 (6.4 ± 0.58 pg/ml) と比較して有意 ($p<0.01$) に高値であった。IL-10は両群間で有意差は認めなかった。IFN- γ , IL-5, IL-12, IL-13は検出されなかった。

まとめ：本研究より、背部の皮膚も用いた経皮免疫は、簡単な投与方法であるが一定期間血清中や唾液中に抗原特異的免疫グロブリンを確認でき、新たな投与経路としての可能性を示唆することができた。この実験系ではTh2型へシフトしていた。

(Auris Nasus Larynx Vol.42 (6) : 478-82, 2015 掲載)

総論第33号

Intranasal Immunization with Phosphorylcholine Suppresses Allergic Rhinitis in Mice

(ホスホリルコリン経鼻免疫によるアレルギー性鼻炎発症の抑制)

宮下 圭一

【序論及び目的】

急性中耳炎など上気道細菌感染症の発生率は依然として高く、さらに薬剤耐性菌が増加している。1990年代半ば以降、多くの国々で蛋白結合型肺炎球菌ワクチンが使用され、侵襲性肺炎球菌感染症の発生率は劇的に減少したが、非ワクチン肺炎球菌株やインフルエンザ菌などによる急性中耳炎が増加し、上気道感染症に有効な広域スペクトラムワクチンの開発が必要とされている。その一つとして一般的な病原体関連分子パターンを持ち、グラム陽性菌と陰性菌の両方の細胞外膜に存在するホスホリルコリン (PC) が注目されている。そこで我々はPCにKeyhole limpet hemocyanin (KLH) を結合させたPC-KLHをマウスに経鼻投与し、それによってPC特異的IgAならびに全身免疫答が誘導され、肺炎球菌およびインフルエンザ菌のクリアランスが亢進することを証明した。さらにPC-KLHによる経鼻免疫では、IgE産生が上昇しなかったことから、PCは特異的IgA

粘膜免疫応答の誘導と同時に、IgE 産生を抑制する可能性も示唆された。これを支持する研究として、PC を保有する肺炎球菌ワクチンが急性喘息発作の頻度を低下させ、喘息の動物モデルにおけるアレルギー性炎症を抑制させることが報告されており、アレルギー特異的 IgE 産生およびアレルギー性炎症の抑制に関連していると推測される。最近の研究では、PC を高発現する肺炎球菌に幼齢マウスを暴露させると、成長後にハウスダスト・ダニ特異的 IgE 産生および気道の過敏性が有意に低下することが示されている。しかし、PC が直接アレルギー特異的 IgE 産生を低下させ、アレルギー性炎症を抑制させるか否かについては、これまで知られていない。PC がアレルギー性炎症を抑制することが示されれば、PC は上気道細菌感染症とアレルギー性疾患の両方の予防に応用できる可能性がある。

そこで、本研究では、PC 経鼻ワクチンが I 型アレルギー疾患であるアレルギー性鼻炎の発症に及ぼす影響を明らかにすることを目的として、卵白アルブミン (OVA) アレルギー性鼻炎モデルに対して、OVA 感作前に PC 経鼻免疫を行い、OVA 経鼻誘発後のアレルギー性鼻炎症状ならびにアレルギー性炎症に対する抑制効果を検討した。

【材料及び方法】

①アレルギー性鼻炎モデルの作成と PC 経鼻免疫の方法

実験には生後 6 週齢の雌性 BALB/c マウスを使用し、PC-KLH 経鼻投与後 OVA 感作群 (PC-KLH+OVA 群)、PBS (Phosphate buffered saline) 経鼻投与後 OVA 感作群 (PBS+OVA 群)、PBS 経鼻投与後 OVA 感作なし群 (対照) の 3 群に分け、アレルギー性鼻炎に対する PC 経鼻免疫の影響を検討した。PC-KLH もしくは PBS の経鼻投与は 1 週毎に 3 回、OVA 腹腔内投与による全身感作も 1 週毎に 3 回行った。

②アレルギー性鼻炎症状の評価と免疫学的観察

OVA 全身感作を 3 回行った後 7 日目 (42日目) から OVA を連日経鼻投与し、8 日目 (49日目) の OVA 経鼻投与直後から 5 分間の鼻かき、くしゃみの回数をそれぞれ計測した。また同日に採血し、血清中の総 IgE および OVA 特異的 IgE 値を ELISA 法で測定した。さらに鼻腔粘膜を採取し、ホルマリン固定後に HE 染色を行い、鼻粘膜に浸潤した好酸球数および鼻粘膜浮腫の程度を評価した。脾臓および NALT (Naso-Associated Lymphoid Tissue: 鼻咽腔関連リンパ組織) も同様に採取し、単核球を分離したのちに CD4⁺ T 細胞を分離し、これを抗原呈示細胞、OVA とともに培養し、上清中の IL-4、IFN- γ を ELISA 法で測定した。また、脾臓から樹状細胞 (Dendritic Cell: DC) を分離し、これを LPS または PC-KLH で刺激し、培養上清中の IL-12p40 の濃度を ELISA 法で測定した。

【結 果】

①アレルギー性鼻炎症状

49日目のOVA経鼻投与後5分間アレルギー症状を観察した。鼻かき・くしゃみの回数は、いずれもPC-KLH+OVA群でPBS+OVA群と比較して有意に減少したが、対照と比較すると有意に高かった。

②血清中の総IgEおよびOVA特異的IgE

血清中総IgEおよびOVA特異的IgE値は、OVAによる全身感作およびOVA経鼻投与後に著明に上昇した。PC-KLH+OVA群では対照より有意に高いがPBS+OVA群と比較して有意に低値であった。

③鼻粘膜組織中の好酸球浸潤と鼻粘膜の肥厚

組織中の好酸球数はPC-KLH+OVA群の方がPBS+OVA群より有意に少なく、対照と同程度であった。鼻粘膜の厚さもPC-KLH+OVA群の方がPBA+OVA群より低値であり、対照と同程度であった。

④CD4⁺T細胞によるIL-4の産生

NALTおよび脾臓から分離されたCD4⁺T細胞によるIL-4産生は、PC-KLH+OVA群がPBA+OVA群と比較して有意に低値であった。なおIFN- γ の産生は、いずれの群でも認められなかった。

⑤LPSおよびPC-KLH刺激による脾臓DCからのIL-12p40産生

ナイーブマウスの脾臓からDC (CD11c⁺細胞) を分離し、LPSおよびPC-KLHでこれを刺激すると、用量依存性にIL-12p40産生が増加した。

【考察・結語】

I型アレルギー性炎症の発症に必須のIgE産生は、Th2型の免疫応答によって亢進し、アレルギー性鼻炎ではNALTにおけるTh2サイトカインであるIL-4やIL-13の産生がその発症に関与する。本研究でNALTから分離されたCD4⁺T細胞におけるIL-4産生を測定したところ、PC前投与群ではPC非投与群と比較して、その産生が有意に抑制され、対照とほぼ同程度であった。一方、脾臓のCD4⁺T細胞からのIL-4産生もPC前投与群で抑制されたが、対照と比較してやや高値であった。以上の結果から、アレルギー性鼻炎の発症には脾臓よりもNALTにおけるTh2型の免疫応答が重要であり、これによりIgE産生や局所の好酸球浸潤が抑制されたと考えられた。またDCは免疫応答の誘導に重要な役割を担う細胞であり、脾臓から分離したDCをPCおよびLPSで刺激したところ、DCからTh1型細胞の分化に関与するIL-12p40の産生が用量依存性に増加した。LPSはDCのTLR-4と結合し、MyD88シグナル伝達経路を介してIL-12の産生を誘導することが知られており、PCを含む糖タンパクであるES-62もTLR-4と結合することから、PC刺激においてもLPSと同様の機序でIL-12p40の産生が亢進したと考えられた。以上の結果から、アレルゲン感作前のPC経鼻免疫が、アレルゲンによるTh2型免疫応答の誘導を阻止し、鼻粘膜におけるアレルギー性炎症およびアレルギー性鼻炎症状の発

症を抑制することが示唆された。

(The Laryngoscope July 2018年掲載)

総論第34号

Mucosal and systemic immune response to sublingual or intranasal immunization with phosphorylcholine

(ホスホリルコリン舌下ならびに経鼻免疫に対する粘膜および全身免疫応答)

問世田 佳子

【序論及び目的】

肺炎球菌ワクチンは、侵襲性肺炎球菌感染症の発症を著しく抑制した。しかし、ワクチン株以外の肺炎球菌やインフルエンザ菌による急性中耳炎に対しては、あまり効果がない。それゆえ、肺炎球菌やインフルエンザ菌の多くの株に対して効果的な広域スペクトラムワクチンの開発が求められている。ホスホリルコリン (PC) は、肺炎球菌やインフルエンザ菌を含む多くの病原菌の構成成分であり、我々はこれまでPCとコレラトキシン (CT) の経鼻投与により粘膜および全身免疫応答が誘導され、複数株の肺炎球菌とインフルエンザ菌のクリアランスが亢進することから、PCが広域スペクトラムワクチンとなり得ることを報告した。その一方で、経鼻投与された抗原やアジュバントが中枢神経系に入り、不活化経鼻インフルエンザワクチンの臨床試験ではベル麻痺が高頻度に発症することが報告されている。したがって経鼻以外のワクチン接種経路を確立する必要がある。その一つの方法として舌下免疫が注目されている。しかし、ワクチンが舌下と経鼻で投与された際の免疫応答誘導の機序の違いは十分に理解されていない。そこで、本研究ではマウスにPCを舌下および経鼻投与し、PC特異的免疫応答を比較し、舌下免疫の有効性と安全性を評価した。

【材料及び方法】

①免疫と検体採取とPC特異的免疫応答の測定

6週齢の雌性BALB/cマウスにPCを舌下および経鼻投与した。さらにそれぞれをCT単独投与群 (CT群) とPC-keyhole limpet hemocyanin + CT投与群 (PC-KLH+CT群) に分け、4群で比較した。舌下および経鼻免疫は1週間毎に3回行い、最終免疫から1週間後に、唾液、鼻腔洗浄液、膺洗浄液、血清を採取しELISA法でPC特異的抗体価を測定した。

② CD⁴ T 細胞からのサイトカイン産生の測定

免疫後に脾臓から CD⁴ T 細胞を分離し、抗原提示細胞としてマイトマイシン処理した脾臓単核細胞を使用した。CD⁴ T 細胞と抗原提示細胞を PC とともに 37℃、5% CO₂ で 72 時間培養し、その上清を回収し、Interferon (IFN)- γ 、interleukin (IL)-4 の濃度を ELISA 法で測定した。

③ 血清総 IgE、CT および PC、KLH 特異的 IgE の測定

血清総 IgE はマウス IgE 測定キットを用いて測定した。CT および PC、KLH 特異的 IgE は、サンドイッチ ELISA 法を用いて定量した。

④ 鼻腔洗浄液中 IgA の肺炎球菌およびインフルエンザ菌に対する反応性

肺炎球菌ならびにインフルエンザ菌それぞれ 10 株の細胞膜溶解液を作成し、それぞれを PC で舌下および経鼻免疫したマウスの鼻腔洗浄液そして PC 特異的マウスモノクローナル IgA と反応させ、その抗体価を ELISA 法で測定した。

【結果】

① PC 特異的粘膜および全身免疫応答

唾液、鼻腔洗浄液、膣洗浄液中の PC 特異的 IgA 抗体価は、舌下、経鼻免疫ともに CT 群より PC-KLH+CT 群で有意に高かった。さらには PC-KLH+CT 群で比較すると、膣洗浄液中の PC 特異的 IgA 抗体価は、舌下が経鼻免疫より有意に高かった。血清中の PC 特異的 IgM、IgG、IgA 抗体価は、舌下、経鼻免疫ともに PC-KLH+CT 群で同程度の上昇を認めた。

② 特異的 Th1 および Th2 型免疫応答の観察

PC-KLH+CT 群では CT 群と比較して舌下、経鼻免疫ともに IFN- γ と IL-4 産生が有意に上昇した。しかし、IFN- γ は舌下が経鼻免疫より高く、IL-4 は経鼻が舌下免疫より有意に高かった。IgG サブクラス抗体価は、PC-KLH+CT 群では舌下、経鼻免疫ともに上昇し、IgG2a 抗体価は舌下が経鼻免疫群より有意に高かった。

③ 血清総 IgE、PC および CT 特異的 IgE

総 IgE は、CT 経鼻免疫群は著しく上昇したが、舌下免疫では上昇しなかった。一方、PC-KLH + CT 群では舌下、経鼻免疫ともに総 IgE は上昇しなかった。CT 特異的 IgE は、CT 経鼻免疫群では上昇したが、舌下免疫では上昇しなかった。また、PC-KLH+CT 群では舌下、経鼻免疫ともに CT 特異的 IgE は上昇しなかった。PC および KLH 特異的 IgE はいずれの群においても検出限界以下であった。

④ 鼻腔洗浄液中 IgA の肺炎球菌およびインフルエンザ菌に対する交差反応性

PC-KLH + CT 群から採取された鼻腔洗浄液中 IgA は殆どすべての肺炎球菌とインフルエンザ菌に反応し、TEPC15 の反応性と正の相関を認めた。

【考察および結論】

本研究により、PC-KLH+CTによる舌下免疫で誘導される粘膜及び全身免疫応答は、経鼻免疫のそれとほぼ同等であった。また腭洗浄液中におけるPC特異的IgAは、舌下が経鼻免疫より有意に上昇したことから、婦人科感染症を予防するには舌下免疫の方が有用と考えられた。IgGサブクラスの検討では、IgG2aは舌下が経鼻免疫より有意に上昇し、舌下免疫ではTh1型免疫応答が優位となることが示され、CD⁴T細胞からのIFN- γ 産生も舌下免疫の方が、IL-4産生は経鼻免疫の方が高値であった。こうしたTh1およびTh2型免疫応答のバランスが舌下と経鼻免疫応答の違いに関与しており、CT群の経鼻免疫では総IgEおよびCT特異的IgEが有意に上昇したが、舌下免疫ではこれらが上昇しなかったのはそのためと思われた。さらにPC-KLH+CT経鼻免疫群では、CT単独で誘導された総IgEを著しく減少させたことから、PC-KLHはIgE産生を抑制すると考えられた。またPC-KLH+CT群の鼻腔洗浄液中のIgAは、肺炎球菌およびインフルエンザ菌の細胞膜と交差反応し、TEPC15の反応性と正の相関があったことから、鼻腔洗浄液中のPC特異的IgAとTEPC15の結合部位がほぼ同一であると考えられた。なお、いくつかのインフルエンザ菌株では反応性が低かったが、これは細胞表面のPC発現の違いによると考えられた。肺炎球菌やインフルエンザ菌の気道上皮への侵入や上咽頭のコロニー形成はPC発現強度と関連していることから、舌下や経鼻免疫で誘導されたPC特異的IgA抗体は常在菌叢に影響を及ぼすことなく、毒性の強い肺炎球菌やインフルエンザ菌の侵入を防ぐと考えられた。

以上の結果から、舌下免疫は経鼻免疫と同様に上気道の粘膜免疫ならび全身免疫応答を誘導することが可能であり、I型アレルギー疾患を発症する危険性が少なく、経鼻免疫よりも安全な免疫経路であると考えられた。またPCは、細菌感染症に加えてI型アレルギー性炎症も抑制できるワクチンとなり得ることが示唆された。

(Auris Nasus Larynx. 2017 May4. 掲載)

1. 新入局員紹介

喜山 敏志

卒後三年目，入局一年目の喜山敏志です。

鹿児島大学を卒業し，鹿児島医療センターでの二年間の初期臨床研修を経て，鹿児島大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科に入局致しました。

研修医の時よりもできること，やるべきことの幅が広がり，あらゆることが新鮮で，先生方の手をお借りしながら，充実した日々を送っております。そんな仕事の息抜きとして，私の一番の趣味はゴルフです。大学に入ってから始め，学生時代はゴルフ部に所属しておりました。

今後，生まれ育った鹿児島の耳鼻咽喉科医療に少しでも貢献できれば幸いです。至らぬ点多々あると思いますが，精進して参りますので，ご指導の程何卒よろしくお願いいたします。

有本 一華

本年度6月より入局させていただきました有本一華と申します。

鹿児島市出身で志学館中高，平成24年鹿児島大学医学部を卒業後，東京の小平市にある公立昭和病院で初期研修を行いました。同病院の耳鼻咽喉科の医局であった東京大学に入局いたしました。1年半大学病院に勤務し，NTT 関東病院，約半年間の産休育休を経て，JR 東京総合病院に勤務しておりました。昨年専門医を取得し，鹿児島に戻る決心をし，この度鹿児島大学に入局させていただくこととなりました。耳鼻咽喉科領域での専門分野等もまだなく，これから先生方の下で精進していきたいと思っております。

至らぬことも多いと思っておりますが，御指導御鞭撻の程何卒よろしくお願いいたします。

藤原 義宜

卒後3年目の藤原義宜と申します。

宮崎県出身で高校卒業後は工学部に進学した後に，再受験を行い九州大学医学部に入学しました。海外旅行が好きで，これまでガラパゴス諸島，ケニア，イスラエル，ヨルダンなどに行ったことがあります。

初期研修は熊本赤十字病院で行い，耳鼻科を回った際に専門性の高さや様々な手技

があることに興味を持ち、耳鼻科医になることにしました。九州大学耳鼻咽喉科に入局し、新専門医制度のため鹿児島大学耳鼻咽喉科専門医プログラムでお世話になることになりました。鹿児島大学の先生方には私を受け入れてくださって非常に感謝しております。

4月から実際に働いてみて知識の無さを痛感していますが、先生方に熱心にご指導頂き、非常に充実した日々を過ごしています。一日でも早く一人前になれるようにこれから精進していきたいと思っております。何卒宜しくおねがいします。

2. 医局人事（平成31年4月現在）

教 授	黒野祐一
講 師	大堀純一郎，永野広海
助 教	宮下圭一，川島雅樹，牧瀬高穂，井内寛之
医 員	間世田佳子，馬越瑞夫，地村友宏，宮本佑美，伊東小都子 田淵みな子，喜山敏志，藤原義宜

医 局 長	川島雅樹
外来医長	牧瀬高穂
病棟医長	永野広海

関連病院（平成31年4月現在）

鹿児島医療センター	西元謙吾，久徳貴之，松崎尚寛
鹿児島市立病院	高木 実
国立療養所星塚敬愛園	宮之原郁代
鹿児島生協病院	積山幸祐
藤元総合病院	森園健介
あまたつクリニック	谷本洋一郎
鹿児島厚生連病院	原田みずえ
豊永耳鼻咽喉科医院	松元隼人

3. 学会報告

第37回 気道分泌研究会

井内 寛之

平成30年4月7日に札幌市で第37回気道分泌研究会が開催されました。大学からは井内が参加しました。井内は「肺炎球菌およびインフルエンザ菌の上皮接着におけるホスホリルコリンの役割」で発表しました。他大学はより詳細に深く突き詰めて研究していることに触発されました。まだ寒い夜でしたが味噌ラーメンで体が温まりました。

第119回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会

永野 広海

2018年5月30日から6月2日まで東京大学耳鼻咽喉科頭頸部外科学分野の主催で横浜市のパシフィコ横浜で開催されました。

黒野教授の研究集大成である宿題報告『上気道炎症の粘膜ワクチンによる制御』を披露されました。会場は立ち見ができるほどの大盛況でした。



一般演題は、大堀純一郎先生は『肺炎球菌ワクチン接種後のホスホリルコリン経鼻追加免疫の効果』、川島雅樹先生は『ホスホリルコリン (PC) と PC 重合体 (リビジュア) によるバイオフィルム形成の抑制』を、私は『PspA 経皮ワクチンによる免疫応答の誘導』をそれぞれ発表しました。今回は宿題報告に関連するそれぞれの研究成果を報告しました。



各施設対抗の駅伝大会が学会期間中に赤レンガ倉庫近くで催され、当教室からは私永野（42歳）、川畠（39歳）、原田（不詳）で参加して参りました。全体では28チーム参加し、14位の結果でした。来年はもっと上位を目指したいと思います。

学会期間中に横浜スタジアムでの横浜ベイスターズ対ソフトバンク（記憶が正しければ）戦を観戦に行きましたが、残念ながら大雨のためノーゲームとなりました。

喜山先生・川畠先生



第42回 日本頭頸部癌学会

川 畠 雅 樹

第42回 日本頭頸部癌学会が6月14、15日に東京の京王プラザホテルで開催され、当科からは黒野教授、大堀先生、私の3人が参加致しました。大堀先生は「咽喉食摘をおこない表在癌と診断された下咽頭癌症例の検討（第2報）」、私は「上顎骨骨折部に生じた扁平上皮癌の2例」の演題名で発表させて頂きました。年々、免疫療法に関する演題が増えており、頭頸部がんの治療が益々多岐にわたったものになることを感じました。また、今学会で初めて知ることができた光免疫療法も大変希望のある治療法で、今後、癌治療そのものが大きく変化していくことを強く感じました。

第80回耳鼻咽喉科臨床学会

地 村 友 宏

平成30年6月29日～30日に横浜（聖マリアンナ医大：肥塚泉教授）で開催されました。当教室からは久徳先生が「不全型川崎病に併発した咽後膿瘍の1例」を、松元隼先生が「びまん性大細胞型B細胞リンパ腫を合併した耳下腺 Wartin 腫瘍の1例」を、地村が「レンバチニブが奏功した甲状腺乳頭癌の5症例」を発表しました。29日は教育セミナーで黒野教授司会で慈恵医大鴻先生の「ESSの基本手技；副損傷の回避と起きてしまった時の対応」を聴講いたしました。他には防衛医大の塩谷先生の経口的咽喉頭部分切除術のセミナーや、高知大の兵頭先生の嚥下障害診断治療のセミナーを受講しました。学会賞記念講演では山梨大の渡辺浩介先生が「IgA腎症に対する口蓋扁桃摘出術の有効性と安全性の検討」を発表されました。耳鼻科医がIgA腎症の手術治療の有効性を検証し啓蒙していくことはとても大切なことだと改めて思いました。専門医共通講習では聖マリアンナ医大の国広先生の「感染症対策の最近の話題」を受講しました。とても有益な学会で、参加させていただいたことに感謝いたします。ありがとうございました。

第13回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会

宮 下 圭 一

平成30年7月12日から13日にかけて、東海大学小児科主催で神奈川県ワークピア横浜にて開催された「第13回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会」に参加致しました。黒野先生は、7月12日の一般演題第11群アレルギーの座長を担当されました。私は一般演題で「小児睡眠時無呼吸症候群に対するアデノイド口蓋扁桃摘出術の治療効果」というタイトルで発表を行いました。教育セミナーやシンポジウムでは小児に対する舌下免疫療法や滲出性中耳炎のガイドライン、小児救急の実際や小児睡眠呼吸障害についての最新の話題に触れることができました。また会員懇親会では、横浜中華街に代表される中華料理はもちろんですが、会場ではきわどいチャイナドレスを着た演奏家の方による二胡と琵琶の演奏があり、印象に残っています。



第33回 日耳鼻九州連合地方部会学術講演会

松元隼人

第33回日耳鼻九州連合地方部会学術講演会が7月14日～15日、別府市で開催されました。当教室からは松崎先生、私の2人が発表致しました。松崎先生は「菊池病の2例」、私は「下顎骨腫瘍として紹介された薬剤関連顎骨壊死の1例」の演題名で発表させて頂きました。菊池病は決してcommonな疾患ではありませんが、リンパ節腫脹の鑑別として念頭においておく必要があります。生検についての知見は今後の診療において、非常に参考になりました。本講演会は各大学でも比較的若い先生方が発表されるのが恒例となっておりまして、その分、耳鼻科医としての日の浅い私に大変良い刺激になりました。恒例の野球大会は、今回は無念の一回戦敗退と相成りました。次回はもっと上を目指せるよう、頭のみならず、肉体も鍛錬が必要だと感じました。

第6回日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会総会・学術講演会

井内寛之

平成30年9月7日～8日に金沢市で第6回日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会総会・学術講演会が開催されました。大学からは黒野教授，久徳先生，研修医の松崎先生，井内が参加しました。黒野教授は招待講演で「米国における研究倫理」について司会をされました。久徳先生は「菌原性深頸部膿瘍の臨床的検討」，井内は「肺炎球菌およびインフルエンザ菌の上皮細胞接着に対するホスホリルコリン重合体の阻害効果」で発表しました。エアロゾルシンポジウムでは吸入療法の原理から薬剤，消毒管理など日常診療に役立つとても有意義なシンポジウムでした。会場が金沢城の近くであり城の雄大さに感銘を受けや市場では新鮮な魚に舌鼓を打ちながら夜が更けていきました。

第31回 日本口腔・咽頭科学会 9月13日～14日 名古屋市

川島雅樹

第31回日本口腔・咽頭科学会が9月13，14日に名古屋市で開催され，当教室からは黒野教授，井内先生，私の3人が参加致しました。井内先生は「高用量シスプラチン併用放射線治療における臨床的検討」，私は「良悪性の術前および術中診断を誤った耳下腺腫瘍の臨床的特徴」の演題名で発表させて頂きました。高用量シスプラチン併用放射線治療は，非常に効果の高い治療ではありますが，治療を完遂するための対策が重要な治療です。そのための栄養の面での評価を行なった井内先生の発表は既に論文になっていますので，ご覧頂けると幸いです。日常診療において，耳下腺腫瘍の良悪性の術前評価が困難な場面には度々遭遇しますが，今回の発表を機に少しでも診断率を上げる工夫をしていきたいと考えております。学会の楽しみの一つに，ご当地の美味しいものを頂くということがあります。美味しいものが多い名古屋の地はその点大満足で，勉強，食べ歩きのとちらもこの上なく満喫することができました。

第57回日本鼻科学会総会・学術講演会

牧瀬 高穂

2018年9月27日から3日間、北海道旭川市で開催された第57回日本鼻科学会総会・学術講演会に、黒野教授、宮之原先生、積山先生、川島先生、地村先生、小生の6名で参加いたしました。宮之原先生は「アレルギー免疫療法診療指針」、積山先生は「小児眼窩骨膜下膿瘍の1例」、川島先生は「高齢マウスにおける複合DNAアジュバントによる免疫応答の再活性化」、地村先生は「ホスホリルコリン経鼻免疫応答におけるコレラトキシン poly(I:C) のアジュバント効果の相違」、小生は「ホスホリルコリン舌下免疫によるアレルギー性鼻炎の抑制」のタイトルで発表いたしました。それぞれ活発な討議が行われ、今後の研究や臨床にとって有意義な発表となりました。旭川は非常に過ごしやすい良い気候でしたが、会期末に大型台風が日本縦断することとなり、日本全国から来られた参加者は帰れる帰れないでんやわんやな状態でした。小生も、帰りの羽田空港で搭乗機を3回変更の末、台風を飛び越えてなんとか帰れました。鼻科学のみならず、自然災害危機管理も学べた学会でした。

第28回日本耳科学会総会・学術講演会

大堀 純一郎

本学会は、平成30年10月3日から6日に大阪国際会議場で開催された。当科からは、黒野教授と私大堀が参加した。恥ずかしながら私は初めて耳科学会に参加させていただいた。大堀は、中耳炎のワクチン予防に関する動物実験の演題を報告させていただいた。耳科学会は、耳科手術の学会で、耳科手術の手技をたくさん勉強できた。近年内視鏡下手術に関しての発展が目覚ましく、内視鏡下手術に関して活発な議論が行われていた。当科では、耳科手術の件数が少なく耳科手術を多数経験することはできないが、新しい手技も積極的に取り入れつつ、スタンダードな治療を確実に行えるように研鑽が必要であると改めて考えさせられた学会であった。

第70回日本気管食道科学会総会・術講演会

宮 下 圭 一

平成30年11月8日から9日にかけて、防衛医科大学校耳鼻咽喉科主催で東京都のTKPガーデンシティ品川にて開催された「第70回日本気管食道科学会総会ならびに学術講演会」に参加致しました。黒野先生は、11月9日のランチョンセミナーにて「アレルギー性鼻炎の診療における抗ヒスタミン薬の位置づけ」というタイトルでご講演され、私は一般演題で「小児睡眠時無呼吸症候群に対するアデノイド口蓋扁桃摘出術の治療効果」というタイトルで発表を行いました。気管食道科学会は、今回70回ということで、耳鼻咽喉科学会の中でも歴史のある学会の一つであり、また呼吸器科や食道外科、甲状腺外科といった幅広い領域の最新の話題に触れることができ、とても刺激になる学会です。今回は防衛医科大学校主催ということもあり、会員懇親会前のミニコンサートとして、海上自衛隊東京音楽隊の演奏を聴くことができました。しかも、黒野先生が持っていた特別席の招待券を譲って頂き、前列の早々たる耳鼻咽喉科領域重鎮の先生方の隣に鎮座して、演奏会を楽しむことができました。さすが自衛隊ということもあり、「日本国家 君が代」の独唱は大変感動し、また明日からがんばろうという前向きな気持ちになりました。



第29回日本頭頸部外科学会ならびに学術講演会

大 堀 純一郎

本学会は、平成31年1月24日から25日に仙台国際センターで開催された。当科からは黒野教授、大堀、井内の3人で参加した。今回の頭頸部外科学会では、ロボット支援手術に関して学会としての方針が発表された。ダヴィンチが頭頸部に承認されたことに伴い、今後学会として術者の認定を行っていく方針とのことであった。当院も表在癌の経口切除にはこれまで積極的に取り組んでおり、ダヴィンチの導入に関しても積極的に取り組もうと決意を新たにすることができた。

第37回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会

地 村 友 宏

平成31年2月7日～9日に大阪（大阪医大：河田了教授）にて開催されました。当教室からは大堀先生が「PCV13接種後のホスホリルコリン経鼻投与による免疫増強効果」を、永野先生が「再発性多発軟骨炎9症例の検討」を、地村が「結合化ホスホリルコリン化合物の粘膜アジュバント効果」を発表しました。ランチョンセミナーで黒野教授が東大近藤健二先生の「アレルギー性鼻炎の発症と病態に関わる背景因子」の司会を務められました。教育講演では国立相模原病院小児科の海老澤先生の「アナフィラキシー up to date」を受講しました。非常に勉強になる内容で、エビデン注の重要性など改めて基本に立ち戻り確認すべきであると思いました。Basic clinical conference「IgA腎症」では原渕先生司会のもと、旭川医大の高原先生とMr.IgA腎症こと堀田修先生が登壇され議論が交わされ、とても印象に残りました。研修医のころに堀田先生の著書を読み大きな感動を覚えたことを思い出しながら拝聴しました。IgA腎症の手術治療の確立は堀田先生をはじめ先人の努力によって築き上げられた財産でもあります。歴史や背景を知って治療にあたると、患者さんに説明するときも有用と思います。これからも知識をup dateしていこうと思います。

The 17th Japan-Korea Joint Meeting Gwangju, Korea

川 島 雅 樹

第17回 Korea-Japan Joint Meeting of Otolaryngology-Head and Neck Surgery が2018年4月6～8日に韓国の Gwangju で開催されました。当教室からは黒野教授，永野先生，私の3人が参加致しました。永野先生は経皮免疫についての基礎研究について，私は扁桃周囲のCTによる膿瘍形態の分類とその臨床的特徴について発表させて頂きました。毎回感じることはあるのですが，韓国の先生方の臨床，基礎研究への熱い想いがヒシヒシと伝わり，よい刺激となりました。これまで Seoul には何度か足を運んだことがありましたが，今回はなかなか訪れる機会の少ない Gwangju での開催であり，Seoul とはまた違う韓国の一面を見ることができました。海外旅行ではありましたが，搭乗定員30人程度の小型機で日本と韓国を行き来するという貴重な体験もできました。

4. 関連病院便り

鹿児島医療センター便り

西 元 謙 吾

平成30年度の鹿児島医療センター耳鼻咽喉科は診療体制が大きく変わりました。まずは4月に後期研修として松元先生が加わり、4人体制となりました。しかし、松崎先生が統括診療部長としての病院業務が多くなっていたので、実質は3人で病棟の担当をすることになっています。さらに、5年間にわたって鹿児島医療センターで勤務していただいた吉福先生が8月で退職し、9月から松元先生・伊東先生、10月からは伊東先生・久徳先生と後期研修医2人体制になり、研修施設という意味合いが強くなってきましたが、手術の質はしっかり保って行けたのではないかと考えています。

初期研修医は今年度も多く回ってきていただき、かなりにぎやかにできました。研修医が同時に2人回ってきたときなどは手術室が立て込んでしまうという贅沢な状況も出てきています。2019年度の鹿児島大学耳鼻咽喉科新入局員として鹿児島医療センターの初期研修医プログラムから喜山先生が入局し、2年連続で鹿児島医療センターから輩出しています。これからも研修医の先生に耳鼻咽喉科診療を大いにアピールしていきたいと思います。

平成30年度の鹿児島医療センターの大きなイベントは、通信病院との合併で肝臓内科・腎臓内科・眼科が新しく増設され、病床数も増加しました。糖尿病合併患者やnivolumab投与症例も増えてきていましたので、副作用・合併症対策などにとっても助かっています。今後はよりチーム医療の重要性が高まってきますので綿密に連携を取っていきたいと考えています。

平成30年度の手術症例は下記のとおりですが、CRT・BRTの発達、経口的切除の適応拡大などで進行癌に対する拡大切除、遊離皮弁による再建術だけでなく、悪性疾患に対する手術全体が減少傾向です。その代わりに放射線治療後のサルベージ手術やCRT・BRTができない高齢者に対する手術などの比率が大きくなってきており、より注意が必要になってきています。全体の症例数としては例年通りで大きなトラブルなく診療できました。当院のスタッフや紹介していただいた先生方に改めてお礼申し上げます。

手術件数（手術記録にあるもの）

良性疾患

口蓋扁桃摘出術（アデノイド切除術同時手術も含む）	106例
内視鏡下鼻副鼻腔手術（devi+subcon 同時手術も含む）	両側65例 片側90例
鼻中隔矯正術・粘膜下鼻甲介骨切除術	14例
BOF など骨折整復手術	5例
鼓室形成術	10例
鼓膜形成術	5例
顔面神経管開放術・内耳窓閉鎖術	7例
外耳道良性腫瘍手術	1例
チューブ留置術・アデノイド切除・先天性耳瘻孔など	22例
耳下腺良性腫瘍摘出術	42例
顎下腺良性摘出術・顎下腺腫瘍摘出術	22例
舌下腺良性摘出術・舌下腺腫瘍摘出術	4例
甲状腺良性腫瘍摘出術	13例
副甲状腺腫瘍摘出術	6例
頸部良性腫瘍・嚢胞摘出術	23例
深頸部膿瘍切開排膿	1例
口腔腫瘍など	8例
喉頭直達鏡手術・食道直達鏡手術	82例
その他（気管切開・リンパ節摘出術・皮弁形成術など）	57例
	583例

悪性疾患

頭頸部悪性腫瘍手術（遊離皮弁による再建術あり：舌 2，口腔底 2，頬粘膜 1，中咽頭 3，下咽頭 3）	11例
喉頭全摘術	3例
喉頭垂直部分切除術	1例
口腔・咽頭悪性腫瘍手術（経口腔的）	18例
喉頭悪性腫瘍手術（経口腔的）	6例
鼻副鼻腔悪性腫瘍手術	5例
頸部郭清術単独	6例
甲状腺悪性腫瘍手術	8例
耳下腺悪性腫瘍手術	6例

顎下腺悪性腫瘍手術	3例
外耳道悪性腫瘍手術	1例
その他	4例
	72例

(悪性腫瘍手術で頸部郭清を行った症例：両側11例 片側16例 合計38例)

総症例数 655例

鹿児島市立病院便り

高 木 実

いつもお世話になっております，鹿児島市立病院耳鼻咽喉科高木です。

最近では毎年度あまり変化を感じられないことが多かったのですが，平成30年度はマンパワーの一時的な増加や研修医が耳鼻咽喉科で研修する機会がありました。

4月から7月まで4ヶ月という短い期間でしたが，伊東小都子先生を新たに迎えました。外来診察室が4つしかないため，なかなか外来診療をして頂くこと機会がありませんでしたが，入院患者業務・急患対応等様々なことをして頂き，残った面々は非常に感謝しています。やはりその期間の手術症例は前年度の2倍程度の増でした。つくづくマンパワーが必要だと感じました。

また1月から3月までは研修医吉田重和先生が耳鼻咽喉科で研修して頂きました。口蓋扁桃摘出術執刀・気管切開術執刀・様々な手術の助手をして頂き，少しでも耳鼻咽喉科の良さを伝えることができたのではと思っています。残念ながら，鹿児島大学病院耳鼻咽喉科へは入局されませんでした，他大学耳鼻咽喉科へ入局をされました。彼曰く『20年後？には帰ってきます』と言っていた。いずれ da Vinci の specialist になって帰鹿し，鹿児島耳鼻咽喉科診療の一翼を担ってくれるものと思います。

今一番欲しいものと聞かれれば，迷わずマンパワーと答えるでしょう！

是非研修医・医局員の派遣を熱望します。

皆様の身の回りに研修医等に声をかけていただければと思います。

いい研修をして頂けると自負しております。宜しく願います。

最後になりましたが，これからも鹿児島市立病院耳鼻咽喉科を宜しく願います。

厚生連病院便り

鹿児島厚生連病院耳鼻咽喉科 原 田 みずえ

皆さま、いつもお世話になっております。平成30年3月までは、火曜日と金曜日のみの非常勤でしたが、平成30年4月からは常勤となり1人体制で、月曜日午後から～土曜日午前中まで、毎日勤務しております。最初の頃は、外来患者も少ない日が続きましたが、最近は大いぶ患者が増えてきました。火曜日は基本的に手術日で、鹿児島大学病院から大堀先生のお手伝いをいただいて、ESSや扁桃摘出術をメインに1日1～2件行っております。

ところで、当院は平成30年5月に病院を建て替え、移転しました。赴任して1ヵ月間だけ、旧病院で診療を行い、GW中に引っ越し作業を行い、GW明けから新病院での診療が始まりました。なかなか経験できないことを体験させていただき、いい思い出です。病院は新しくなったものの、1人体制ですし、検査機器がそろっておらず、診療や検査が十分にできないのが、残念ではありますが、開業医の先生方と鹿児島大学病院や鹿児島市立病院、鹿児島医療センターの中間ぐらいの位置づけで、気軽に受診できる病院になるかと思っております。おかげ様で、開業の先生方からも入院や手術の依頼も増え、常に1～2人は入院患者もいる状態です。

今後も、少しずつ環境を整えていって、もっといい医療を患者に提供できるように頑張っていこうと思っております。

《手術内訳》

術式	件数
両側口蓋扁桃摘出術（習慣性扁桃炎10，扁桃病巣感染症2）	12
ESS（Ⅲ型1件，Ⅳ型2件）	3
ESS（Ⅳ型）＋内視鏡下 鼻中隔矯正術	5
ESS（Ⅲ型1件，Ⅳ型1件）＋内視鏡下 鼻中隔矯正術＋下鼻甲介粘膜下切除術	2
内視鏡下 鼻中隔矯正術	2
内視鏡下 鼻中隔矯正術＋下鼻甲介粘膜下切除術	5
内視鏡下 鼻中隔矯正術＋下鼻甲介粘膜下切除術＋後鼻神経切断術	3
内視鏡下 鼻中隔矯正術＋下鼻甲介粘膜下切除術＋鼻茸切除術	3
内視鏡下 下鼻甲介粘膜下切除術	2
内視鏡下 下鼻甲介粘膜下切除術＋後鼻神経切断術	1
気管切開術	2
甲状腺部分切除術（右葉）	1
合計	41

診察室



(#平成最後の) 藤元総合病院便り2019

森園 健介

皆様いかがお過ごしでしょうか。藤元総合病院に勤務させていただいております森園です。

2019年に入り、気が付けば新しい元号の令和も目前に迫っております。(原稿の締め切りを過ぎてから記載しているのがバレますが・・・) 新元号発表の記者会見はやはり

リアルタイムで見てみたかったので、外来の看護師さんに「待合室のテレビに官房長官が出てきたら教えてね。」と伝えて外来業務を行っていたのですが、その看護師さんが「新元号は令和だってよー」とのんきに口頭で伝えてくれたのが悲しかったです。

さて平成の30年間が過ぎようとしていることに際して、自分も歳を取ったなど実感させられることが最近特に多くなってきました。まずここ数年で老眼が顕著になりました。無意識にスマホの画面を見るときに眼鏡をはずすようになった自分に当初は愕然としたものです。また心なしか人の話を聞き返すことが多くなった気がしていて、語音明瞭度の低下も徐々に出てきているのではないかと戦々恐々としております。

またこれは不摂生の賜物でもあります。職場の健康診断でもあれこれ引かかるようになり、薬を常に持ち歩くようにもなりました。それでも大きな病気を起こすこともなく過ごしていたのですが、先日激しい下腹部痛を生じ、泌尿器科で尿管結石との診断を受けました。内臓痛に耐えながら治療に励み、ようやく症状が落ち着いてきたころ、今度は心窩部に激しい内臓痛！　そういえば尿管結石の精査で撮ったCTで胆管結石も指摘されていたような・・・などと頭の奥で考えながら深夜に七転八倒致しました。ダブルの結石に打ちのめされた結果もうちょっと減量して、体調に気を付けようとの思いに至ったここ数日のお話でした。

さて当院のここ1年間の変化ですが、設備面では特に大きな変化はありませんでしたが、これまで頭頸部領域の悪性腫瘍などで、根治治療が困難な症例や再発症例などで大変お世話になっていた在宅療養科の馬見塚先生が御都合により3月いっぱい当院を離れられました。患者さんからも本当に慕われており、院内コンサートなどでドラムを叩く雄姿はある意味病院の顔でもありました。非常に残念ですが先生の退職にあたり、今後の重症症例への対応について自身の精進が改めて必要と考えております。

日々の業務におきましてはこれまでと同様に大学病院等の先生方や、近隣の御開業の先生方には御迷惑をおかけすることが多々あるかと思いますが、引き続き今後ともどうか宜しくお願い致します。

鹿児島生協病院便り

積山幸祐

働き方改革の一環で2019年4月から施行される年次有給休暇（有給・年休）の指定義務化にむけ、生協病院でも2018年から有給休暇を計画的に取るように指示があり、今までほとんど消費していなかった有給休暇を消費するように努めた1年でありました。そのため、土曜日の休診や臨時休診が増え、ご迷惑をおかけしました。

平成最後の年である2018年度も一人体制でマンパワー不足が否めませんでした。幸い大きな問題はなく、何とか外来・病棟診療を行うことができました。

元号が新しくなりますが、2019年度も安全で質の高い医療を提供していきたいと考えています。

2018年度の手術室での手術症例は170例で昨年度の156例より増加しました（表）。手術はほとんど待ち期間なく施行できますので、ご紹介ください。

2018年度手術症例	計
扁桃摘（含む同時施行アデノイド切除、チューブ挿入）	61
アデノイド切除（含む同時施行チューブ挿入術）	3
咽頭腫瘍摘出術（経口法）	4
がま腫（舌下腺）摘出術	2
唾石摘出術（経口法）	2
声帯ポリープ切除術（直達鏡下）	4
声帯嚢胞摘出術（直達鏡下）	2
喉頭腫瘍摘出術（直達鏡下）	3
ポリープ様声帯手術	1
甲状舌管嚢胞摘出術	2
甲状腺悪性腫瘍手術（切除）	1
副甲状腺悪性腫瘍手術	1
耳下腺浅葉摘出術	5
耳下腺悪性腫瘍手術（切除）	1
顎下腺摘出術（唾石）	1
気管切開術（外科的）	6
頸部膿瘍切開排膿術	1
頸部腫瘍摘出術	1
ESS（含む同時施行 devi. Sub.con.）	25
内視鏡下鼻中隔手術 I 型 + 内視鏡下鼻腔手術 I 型	2
術後性上顎嚢胞手術（ESS）	4
鼻副鼻腔腫瘍摘出（ESS）	1

鼻前庭部腫瘍摘出術	1
鼻前庭嚢胞摘出術（ESS）	1
鼓膜形成術	3
鼓室形成術	5
顔面神経減荷術	1
鼓膜チューブ挿入術	13
先天性耳瘻管摘出術	11
耳介腫瘍摘出術	1
上顎骨骨折整復術	1
計	170

天辰病院便り

谷 本 洋一郎

天辰病院の谷本です。今年で天辰病院に赴任して丸11年になります。

昨年8月に院長先生の息子さんが天辰病院に赴任されて、外科が二人体制となり、入院患者さんも増加し、化学療法の患者さんも外来、入院ともに増加し、ますます大学病院との関連も強くなってきています。治療内容も多岐にわたるようになり、スタッフも新しく学ぶことも多く充実した仕事が行えているようです。耳鼻咽喉科の方は相変わらず一人体制で、入院患者さん数は現状維持といったところですが、外来患者さんは徐々に増加してきています。特に今年はスギ花粉の飛散量が多く、これまでになく花粉症の患者さんが多く来院されました。

当院は私が赴任してからは11年ですが、耳鼻咽喉科としては昭和59年から増科されており、残っている資料を見ていると大先輩方の手術記事等がでてきて当院耳鼻咽喉科の長い歴史を実感します。そのためか医療機器もかなりの年代物が残っており、時々メンテナンスに来られた業者の方がびっくりすることもあります。その中で患者さんの診察椅子が先日ついに壊れてしまい、新しくなりました。古いとは言え、自分が11年近く毎日のように使っていたので、運び出される時はさみしくもあり、まだ新しい椅子の操作にも慣れないところです。

天辰病院だよりを私が書かせていただくのは今年で最後になろうかと思いますが、引き続き、入院患者様の御紹介等よろしくお願い致します。

XII. 関連病院

(令和元年5月現在)

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
国立病院機構 鹿児島医療センター	892-0853	鹿児島市城山町8-1 TEL:099-223-1151 FAX:099-226-9246	月・水・金 (8:30~11:00)	月・火・水 木・金
国立療養所星塚敬愛園	893-0041	鹿屋市星塚町4204 TEL:0994-49-2500 FAX:0994-49-2542	月・水 (8:30~17:00)	
鹿児島市立病院	890-8760	鹿児島市上荒田37-1 TEL:099-230-7000 FAX:099-230-7070	新患 月・水・金 再診 火・木 (8:30~11:00)	月・水・金
鹿児島生協病院	891-0141	鹿児島市谷山中央 5丁目20-20 TEL:099-267-1455 FAX:099-260-4783	月・火・木・金 (8:30~17:30) 水・土 (8:30~12:30) (新患は30分前まで)	火・水・木 の午前
今村総合病院	890-0064	鹿児島市鴨池新町11-23 TEL:099-251-2221 FAX:099-250-6181	火 (8:30~16:30)	
藤元総合病院	885-0055	都城市早鈴町17-1 TEL:0986-25-1212 FAX:0986-25-8941	月・水・木・金 (9:00~17:00) 火 (9:00~11:00)	火の午後

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
あまたつくクリニック	891-0175	鹿児島市桜ヶ丘4-1-6 TEL:099-264-5553 FAX:099-264-1771	月・火・木・金 (9:00~17:30) 土 (9:00~12:30)	土の午後
垂水中央病院	891-2124	垂水市錦江町1-140 TEL:0994-32-5211 FAX:0994-32-5722	火・木 (14:00~17:00) 土 (9:00~12:30)	
加治木温泉病院	899-5241	始良市加治木町木田4714 TEL:0995-62-0001 FAX:0995-62-3778	木 (10:00~16:30)	
種子島医療センター	891-3198	西之表市西之表7463 TEL:09972-2-0960 FAX:09972-2-1313	火 (9:00~17:30) 水 夏(14:00~17:00) 冬(14:00~16:20)	
出水郡医師会 広域医療センター	899-1611	阿久根市赤瀬川4513 TEL:0996-73-1331 FAX:0996-73-3708	火・金 (8:30~15:30)	
栗生診療所	891-4409	熊毛郡屋久島町栗生1743 TEL:09974-8-2103 FAX:09974-8-2751	隔週木曜日 (8:00~15:30)	

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
豊永耳鼻咽喉科医院	868-0037	人吉市南泉田町120 TEL:0996-22-2031	第2, 4土曜日 (9:00~15:00)	
鹿児島厚生連病院	890-0061	鹿児島市天保山町22-25 TEL:099-252-2228 FAX:099-252-2736	水 (14:00~17:00) 木・金 (8:30~17:00) 土 (8:30~11:30)	火
公立種子島病院	891-3701	熊毛郡南種子町 中之上1700-22 TEL:0997-26-1230	隔週木曜日 (8:30~16:00)	
ゆのもと記念病院	899-2201	日置市東市来町湯田3614 TEL:099-274-2521 FAX:099-274-3306	火・水・木・金 (9:00~17:30) 土 (9:00~12:30)	

氏 名	在 局 期 間	連 絡 先
1 李 廷権 (韓国, 延世大学)	昭和60年7月1日 ～61年12月25日 平成元年6月26日 ～8月25日	Department of Otolaryngology Severance Hospital College of Medicine Yonsei University C.P.O. BOX 8044, Seoul, 100-680 KOREA TEL 82-2-2228-3605
2 Richard T. Jackson (アメリカ, Emorty 大学)	昭和60年9月6日 ～12月5日	Emory University School of Medicine Center Laboratory of Otolaryngology 441 Woodruff Memorial Building Atlanta, Georgia 30322 U.S.A.
3 関 陽基 (韓国, ソウル大学)	昭和61年1月22日 ～2月21日	Department of Otolaryngology College of Medicine Seoul National University 28 Yoongun-Dong, Chongro - Koo Seoul 110, KOREA
4 Sumet Peeravud (タイ, ソンクラ大学)	昭和62年5月7日 ～7月11日	Department of Otolaryngology Faculty of Medicine, Prince of Songkla University Haadyai, Songkla Thailand
5 Khemchart Tonsakurunguang (タイ, チョラロンコン大学)	昭和62年6月25日 ～63年6月14日	Department of Otolaryngology Faculty of Medicine Chulalongkorn University Bangkok 10500, Thailand
6 金 済霖 (中国, 中国医科大学)	昭和62年8月1日 ～10月29日	中華人民共和国 沈阳市和平区南京街五段三号 中国医科大学附属第一医院 耳鼻咽喉科学教室
7 Phanuvich Pumhirum (タイ, タイ軍医科大学)	昭和63年3月9日 ～3月31日	Department of Otolaryngology Phra Mongkutklao Hospital Bangkok 10400, Thailand
8 Phakdee Sannikorn (タイ, ラジブチ病院)	昭和63年4月5日 ～平成元年6月5日	Department of Otolaryngology Rajvithi Hospital Rajvithi Road, Phayathai, Bangkok 10400 THAILAND TEL 2460052 EXT 520

氏 名	在 局 期 間	連 絡 先
9 Acharee Sorasuchart (タイ, チェンマイ大学)	昭和63年 4月24日 ～ 5月15日	Department of Otolaryngology, Faculty of Medicine, Chiang Mai University Chiang Mai 50002, THAILAND
10 Cheerasook Chongkolwatana (タイ, マヒドール大学)	昭和63年 5月 9日 ～ 9月30日	Department of Otolaryngology Faculty of Medicine Siriraj Hospital Mahidol University Bangkok 7, THAILAND
11 Chul-Hee Lee (韓国, ソウル大学)	昭和63年 7月14日 ～ 8月14日	Department of Otolaryngology College of Medicine, Seoul National University 28 Yeonkun-dong, Chongro-ku, Seoul, 110 KOREA
12 金 春順 (中国, 白求恩医科大学)	平成元年 3月 6日 ～ 4月 5日 平成 2年 4月 1日 ～ 9月30日 (11月14日) 平成 4年10月26日 ～11月 3日	中国吉林省長春市南岭小街吉林工大新村18棟 5 号
13 Surat Mongkolaripong (タイ, ラジブチ病院)	平成元年 3月10日 ～10月31日	Department of Otolaryngology Rajvithi Hospital Rajvithi Road, Phayathai, Bangkok 10400 THAILAND TEL 2460052 EXT 520
14 Pierre-Marie Benezeth (フランス, グルノーブル大学)	平成元年 9月 8日 ～10月17日 平成 3年 4月 7日 ～ 4月 9日	7 Place De La Republique 26000 Valence France TEL 75-43-11-86 FAX 75-55-41-10
15 Preedee Ngaotepprutaram (タイ, マヒドール大学)	平成元年 9月14日 ～ 2年 9月13日	Department of Otolaryngology Prapokkiao Hospital Amphoe Muang, Chanthaburi 22000, THAILAND
16 Myung-Whun Sung (韓国, ソウル大学)	平成 2年 1月20日 ～ 3月19日	Department of Otolaryngology College of Medicine, Seoul National University 28 Yeonkun-dong, Chongro-ku, Seoul, 110 KOREA
17 鄭 勝圭 (韓国, 延世大学)	平成 2年 3月 9日 ～ 3年 4月27日	Department of Otolaryngology Samsung Medical Center 50 Ilwon-dong, Kangnam-ku Seoul, 135-230 KOREA 135-230

氏 名	在 局 期 間	連 絡 先
18 Markus Rautiainen (フィンランド, クオピオ大学)	平成 2 年 12 月 7 日 ～ 3 年 12 月 21 日 平成 5 年 10 月 12 日 ～ 10 月 17 日	Department of Clinical Sciences(ENT) Tampere University, PL607 SF-33101 Tampere Finland
19 Dacha Noonpradej (タイ, ハジャイ病院)	平成 3 年 4 月 10 日 ～ 9 月 7 日	Department of Otolaryngology Haadyai Hospital Haadyai, Songkhla, 90110 Thailand TEL 074-230800-4
20 Chehlah Muhmaddaoh (インドネシア, YARSI 医科 大学)	平成 4 年 5 月 17 日 ～ 5 年 5 月 16 日	113/18 Siroros Road T. Seteng A. Muang C. Yala (95000) Thailand FAX 66-073-221665
21 方 深毅 (台湾, 台湾大学)	平成 4 年 7 月 1 日 ～ 9 月 26 日	Department of Otolaryngology National Cheng Kung University Hospital 138, Sheng hi Road, Tainan 70428 Taiwan, R.O.C. TEL 06-2353535 EXT 2309
22 Ic-Tae Kim (韓国, ソウル大学)	平成 5 年 8 月 3 日 ～ 9 月 28 日	Department of Oto ; laryngology College of Medicine, Seoul National University 28 Yeonkun-dong, Chongro-ku, Seoul, 110 KOREA
23 Joon-Heon Yoon (韓国, 延世大学)	平成 5 年 6 月 5 日 ～ 6 月 8 日 平成 6 年 1 月 18 日 ～ 3 月 1 日	Department of Otolaryngology Severance Hospital College of Medicine Yonsei University C.P.O. BOX 8044, Seoul, 100-680 KOREA TEL 82-2-361-5780
24 Prasit Mhakit (タイ, Pramongkutklao 大 学)	平成 6 年 3 月 11 日 ～ 6 月 4 日	Department of Otolaryngology Pramongkutklao College of Medicine, Thailand TEL 662-246-0066 EXT 3076, 3100
25 呂 宏光 (中国, 大連医科大学)	平成 6 年 4 月 2 日 ～ 4 月 19 日	中華人民共和国 大連市中山路222號 大連医科大学附属第一病院 耳鼻咽喉科学教室 〒 116011 TEL 3635963-3088
26 王 振 海	平成 5 年 1 月 25 日 ～平成 9 年 3 月 31 日	中国医科大学附属第二病院 耳鼻咽喉科

氏 名	在 局 期 間	連 絡 先
27 Jussi Laranne (フィンランド, タンペレ市)	平成6年4月4日 ～7年6月13日	SUKKAUAR TAAN KATU 6A8 33100 TAMPERE Finland
28 Sidagis Jorge	平成6年10月3日 ～11年3月31日	Comp. Hab. Malvin Norte, Calle 122, N° 2152/301, Block 7, Montevideo, CP11400 U URUGUAY (South America)
29 馬 秀 嵐 (中国, 中国医科大学)	平成8年1月25日 ～8年12月30日	中国瀋陽市和平区南京北155号 中国医科大学第一臨床学院耳鼻咽喉科 〒110001
30 歐 俊 巖	平成13年3月23日～H13. 9	Department of Otolaryngology National Cheng Kung University Hospital 138, Seng Li Rd., Tainan Taiwan TEL +886-6-2353535 FAX +886-6-2377404
31 孫 東	平成13年4月2日～H17. 3	114003 中国遼寧省鞍山市鉄来区対炉山新興衛21-7号
32 王 旭 平	平成20年11月1日 ～H21年2月13日	〒210002 中国江苏省南京市白下区楊公井34棟34号 南京市楊公井病院 耳鼻咽喉科 電話番号：86-25-80864050 (office) 86-25-84542942 (home)

氏 名	最終職別	在 局 期 間
西 宜 行	研 修 生	59. 4-59. 6
河 野 正 樹	研 修 生	60. 4-60. 6 61. 1-61. 3
山 内 慎 介	研 修 生	62. 4-62. 6
四 元 俊 彦	研 修 生	63. 4-63. 6
畑 幸 宏	研 修 生	63.10-63.12
三 角 芳 文	研 修 生	63.10-63.12
吉 満 伸 幸	研 修 生	H2. 7-H2. 9
斧 淵 泰 裕	研 修 生	H2.10-H2.12
宮 原 広 典	研 修 生	H3. 1-H3. 3
黒 木 茂	研 修 生	H5. 7-H5. 9
神 野 公 宏	研 修 生	H5.10-H5.12
藤 郷 秀 樹	研 修 生	H5.10-H5.12
的 場 康 平	研 修 生	H7. 1-H7. 3
伊瀬知 敦	研 修 生	H7.10-H7.12
泊 口 哲 也	研 修 生	H8. 1-H8. 3
島 名 昭 彦	研 修 生	H8. 7-H8. 9
福 田 弘 志	研 修 生	H8.10-H8.12 H9. 4-H9. 6
安 藤 五三生	研 修 生	H9. 1-H9. 3
吉 元 英 之	研 修 生	H10.4-H10.6
肘 黒 公 博	研 修 生	H11.1-H11.3
横 山 孝 二	研 修 生	H11.4-H11.6

氏 名	最終職別	在 局 期 間
田 中 裕 之	研 修 生	H11.7-H11. 9
永 野 広 海	研 修 生	H13.6-H13.12
森 田 喜 紀	研 修 生	H15.1-H15. 3

鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室 同 門 会 会 則

(総則)

第1条 本会は鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室同門会と称する。

第2条 本会は鹿児島大学大学院耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室（以下教室と略す）に事務所をおく。

(目的ならびに事業)

第3条 本会の目的は会員相互の親睦を図り、学術研究ならびに社会的発展に資するにある。

第4条 本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

1. 同門会総会の開催
2. 同門会誌ならびに会員名簿の発行
3. 記念事業の開催
4. その他本会の目的を達成するために必要な事業

(会則)

第5条 本会は会員を次のとおりとする。

教室に在籍又はこれと同等と認められる者。本会の趣旨に賛同し入会を希望して承認された者。

第6条 本会の運営は会費及び寄付金をもって行う。会費は年会費（開業医10,000円、勤務医4,000円）を納めるものとする。特別会員、顧問は会費を免除する。（但し70歳以上）

第7条 会費を滞納した会員は本会より連絡を受けられないことがある。

第8条 会員は希望により退会することができる。

第9条 会員であって本会ならびに教室の名誉を著しく傷つけた場合には役員会の決議を経て会長がこの者を除名することができる。

(役員)

第10条 本会には次の役員をおく。会長1名、副会長、理事、監事、幹事それぞれ若干名。

なお本会に名誉会長ならびに顧問をおくことができる。役員任期は3年とする。

第11条 会長は教室主任教授又は同門会会員から選び、会務を統轄する。

第12条 役員改選時、(旧)役員会は(新)会長候補を決定し、総会での承認を経て

新会長が選出される。

第13条 副会長は会員の中から会長がこれを委嘱し、会長を補佐する。

第14条 理事は会員の中から会長がこれを委嘱し、会務を審議する。

第15条 監事は役員会においてこれを選出し、会長がこれを委嘱する。

監事は会計を監査する。

第16条 幹事は会員の中から会長がこれを委嘱し、会務処理に当たるものとする。

第17条 名誉会長ならびに顧問は会員の総意に基づき推挙されるものとする。

(会議)

第18条 総会は年1回開催する。必要があれば会長は臨時総会を招集し得る。

総会における決議は出席会員の過半数をもってする。

第19条 役員会は会長が招集し、事業計画、経理その他重要な事項を審議する。

(会則の変更)

第20条 本会の会則は総会の承認を得て、変更することができる。

(本会則は平成22年1月17日より施行する。)

●●●●●●●●●● 編 集 後 記 ●●●●●●●●●●

「石ばしる 垂水の上の さ^{わらび}蕨の 萌え出づる春になりけるかも」

令和の典拠「万葉集」に記載されている志貴皇子の一首です。岩からほとばしる滝のそばで、緑鮮やかな若い蕨が春の光と薫りの中で芽を出している光景が鮮やかに想起されます。また、春の到来を素直に歓ぶ心が躍動感をもって伝わってきます。新しく当教室の仲間として加わった先生方の姿と共に、それを歓ぶ教室員の心と重なり合います。各先生方が近い将来、随所に主となり共に活躍されんことを心より祈念いたします。

同門会および地方部会の先生方におきましては、第120回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会において多大なるご支援をいただき、大変感謝しております。本当にありがとうございました。今後ともご支援のほど何卒よろしくお願い致します。

(文責：川島雅樹)

令和元年6月吉日

編集長 (医局長) 川島雅樹

編集委員 地村友宏

大夫堀昌子

さくらじま 第33号

令和元年7月26日 印刷

令和元年8月2日 発行

発 行 鹿 児 島 大 学 大 学 院
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室
電話 (099) 275-5410

印 刷 斯 文 堂 株 式 会 社
電話 (099) 268-8211

